

第 1 章

障害者スポーツ選手のキャリア調査

本調査は一昨年度から開始しており、選手一人ひとりの個人史ならびにスポーツキャリアに関わるインタビューを実施し、どのような環境、支援、他者との関わりの中でスポーツを始め、継続しているのかについて検討している。今年度は17名の選手に協力をいただき、オンラインもしくは対面で、それぞれ1時間から1時間半程度のインタビューを実施した。なお、事前に調査目的、個人情報の管理、調査の任意参加、調査協力を中止しても不利益が生じないこと等の同意を得た上で調査を実施した。協力いただいた選手は、男性13名、女性4名で、先天性障害3名、中途障害14名、年齢は21歳～62歳(平均40.0歳)であった。主な質問項目は、個人的属性、競技歴、障害発生からスポーツ開始までの経緯、障害受傷前のスポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響、障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境、障害者スポーツ継続に関する状況、スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境、今後のスポーツ実施意向等である。

なお、本調査は日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認(申請番号18-11)を受けて実施した。また、調査にあたっては、本プロジェクトメンバーのほか、日本福祉大学スポーツ科学部の兒玉友准教授の協力を得た。

まず、それぞれのスポーツ開始の局面に着目すると、前年度と同様に中途障害の選手を中心に、病院やリハビリテーションセンター等の医療職から、障害者スポーツに関する情報提供を受けるケースが多いことがわかる。また、今年度の調査報告において注目されるのが「義肢装具士」の存在である。調査対象者のうち6名が下肢切断の選手であり、そのほとんどがスポーツ開始に影響を与えた人物として義肢装具士を挙げていた。スポーツに関わる補装具として、車椅子や義足を上げることができが、義足は車椅子以上に個別性が高く、本人の体格や装着部位に合わせた調整が必要であると同時に、実施競技によって形状や機能が全く異なることから、障害者スポーツに関する経験や知識を持った義肢装具士との出会いが、その後のスポーツキャリアに大きな影響を与えているものと考えられる。

また、調査対象者の多くが挙げていたのが「ロールモデル」の存在である。「同じ切断の選手が会いに来てくれた。何ができるか質問したが『全部できるよ』と答えてくれた。」「義足の友人がいたことが大きい。彼は片足でスキーをし、普通に生活しているのを見ていたので、義足や切断に対する不安がなかった。」という言葉にみられるように、単なる憧れではなく、同様の障害があり、自分がこれから取り組んでいきたいと考えている競技を行っている選手と出会うことで、より具体的なスポーツキャリアをイメージできるようになるのではないだろうか。

先天性障害のある選手に関しては、前年度も指摘したとおり、学齢期の体育やスポーツ経験がその後のスポーツ活動の開始に大きな影響を及ぼすものと考えられる。本調査において、

先天性障害のある選手は少数に留まっているが、Kさんは、特別支援学校から普通学校へと転校後、体育授業はすべて見学であり、就職後もしばらくの間は運動する機会に恵まれなかったという。また、他の事例から、普通学校で体育や部活動に取り組めていたとしても、「健常者と同じように取り組まなければいけない」という葛藤が生じていることが明らかになった。先天性の弱視であるPさんは幼少期から水泳に取り組み、中学校、高校ともに水泳部で活動し、「高校までは『すべて健常者と同じようにしなければならない』』と考えていたそうである。その後、大学入学後に障害者水泳のクラブに出会い、「自分の障害に合わせて練習すれば良い」と考え方が変わっていったという。

以上のKさん、Pさんの事例のみで普通学校での取り組みを一般化することはできないが、普通学校での体育や部活動の取り組みについて、両者は「(障害があるから)不参加」もしくは「(健常者と同じように)参加」という二者択一を迫られていたのではないだろうか。先天性障害もしくは幼少期から障害のある人々にとって、学校体育や運動部活動等は各々のスポーツキャリアの端緒となるものであり、非常に重要であるが、前年度調査も含め体育や部活動参加の困難性が垣間見られ、今後より詳細な検討が必要であると考えられる。

また、前年度の報告において、スポーツ活動の継続に影響を与えている要因として「アスリート雇用」を取り上げたが、アスリート雇用で競技に専念している選手たちが、現役引退後にどのようなセカンドキャリアを築いていくのかも注目される場所である。調査対象者のうち、国際レベルで活躍している選手数名が、現役引退後に「指導者」を志しており、現在の所属企業に籍を置いたまま指導に取り組みたいという意向を持っている一方で、「現在所属している会社とは～(中略)今後のことは詰め切れていない」という言葉も見られた。2013年の東京パラリンピック招致決定後、アスリート雇用の選手が増加してきたが、東京パラリンピック終了後にどのような変化が生じていくのであろうか。所属先企業が現役引退後もその選手を継続雇用するとしても、スポーツ指導を本務とするのではなく、「一般社員」として社業に専念しなければならない、また、契約時に所属先企業・選手間のコミュニケーションが十分に図られていなければ、現役引退後に契約満了となる可能性もあるのではないだろうか。

前述のように、スポーツの開始や継続局面において「ロールモデル」の存在が非常に重要であり、そのような立場の選手たちが引退後に指導者となることは、障害者スポーツの普及や競技力向上の一助となっていくものと考えられる。このようなセカンドキャリアに関しては、現役時代と同様に企業の何らかの支援が必要になるものと考えられる。

東京パラリンピックに向けて拡大してきた「アスリート雇用」について、企業の採用意欲が今後拡大・縮小していくかという議論のみならず、引退後のアスリートのキャリア支援を含み込

んだ制度として定着していくのが注目されるところである。

本調査結果より、これまでと同様に医療職からの障害者スポーツに関する情報提供の重要性が指摘され、特に下肢切断者においては「義肢装具士」との出会いがターニングポイントになっていることが明らかになった。また、「ロールモデル」の存在がその後のスポーツキャリアの形成に大きな影響を与えているものと考えられる。先天性障害のある選手に関しては、特に普通学校在学時の体育やスポーツ活動への参加に困難性がみられ、次年度以降更なる検討が必要である。また、アスリート雇用の選手が増加してきている中で、企業からの各種支援が現役中のみに留まるのか、引退後のセカンドキャリアを含むものなのかについて、今後事例検討を進めていきたいと考えている。

(河西正博)

■図表1-1 キャリア調査インタビュー一覧

※パラスポーツ開始時の競技と現在の競技が違う
場合は最初の競技開始時について記載
※一般雇用には障害者雇用を含む

項目	21-A	21-B	21-C
調査年度	21	21	21
識別記号	23	24	25
生まれた年	1990	1982	1985
性別	男	男	男
居住地域	東海	関西	東海
調査時身分	一般雇用	選手雇用	選手雇用
障害発生年齢	19	17	19
障害内容	肢体	肢体	肢体
障害程度	重度	中度	重度
学校種別	普通	普通	普通
現在実施競技	ボッチャ	陸上競技	車いすラグビー
競技開始年齢※	22	20	20
レベル	国内上位	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者※	・見学に行ったツインバスケットの選手	・PT(理学療法士) ・義肢装具士	・車いすラグビー日本代表の強化に関わっていたリハビリテーションセンターでスポーツ指導を担当していた先生 ・体験会で出会った車いすラグビー日本代表 ・車いすラグビーのDVD
パラスポーツ開始場所※	・地元ボッチャクラブ(市内公共センター)	・スノーボード:山(スキー場) ・陸上競技:N市競技場(クラブメンバーとして)	・リハビリテーションセンター
パラスポーツ情報提供者※	・見学に行ったツインバスケットの選手 ・地元ボッチャクラブ	・スノーボード雑誌 ・専門学校の先生 ・PT(理学療法士) ・義肢装具士	・リハビリテーションセンターでスポーツ指導を担当していた先生
パラスポーツ開始場所へのアクセス※	・本人	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・両親	・一緒に練習しているレベルが同じくらいの学生達 ・陸上部指導者(大学・大学院の指導教員) ・専門学校の先生	・家族
パラスポーツ継続状況	・週末の土日に練習1回4時間程度している。(場所は自宅、近隣の福祉法人が持つ体育館。廃校になった学校の体育館)大会にはコロナがなければ年に2〜3回出ている。 ・会社にはボッチャをやることを了解してもらっており、ボッチャの活動も勤務時間とみなしてもらっている。 ・講演やデモンストレーションで小学校などに行っている。 ・継続していく上で大変なのは練習場所の確保(練習場所がない・少ない)	・専門学校:中部地区のクラブチームで ・大学:陸上部で他の学生と一緒に練習 ・S社:午前中から午後2時までは勤務、母校の大学施設を利用して練習。その後学生とともに16時20分〜練習。土日遠征も勤務扱い。遠征費等はほぼ会社がカバーしてくれていた。 ・現在:母校の大学施設で練習。(コロナ禍で)午前中練習、月・水・金は走って練習+午後・ウェイト、火・土はウェイト練習とプール。木はプールだけ。日曜は完全休養。午後は時に講演など。	・2008年から関東の車いすラグビーチームでプレーを始め、2018年頃から西日本のチームに移籍し、2011年から現在まで日本代表選手として活動。 ・現在は週3日から5日程度、日本財団パラアリーナで関東圏のチームのメンバーと練習をすると同時に、月に1回程度所属チームの練習に参加。
支援	・なし	・勤務先、スポンサー、公的機関	・勤務先、公的機関
将来ビジョン	・ボッチャはこれからも上を目指して続けていく。 ・バリのパラリンピックに出場したい。	・会社にも所属しつつ指導者として後進の指導にあたるのと考えている。 ・ロサンゼルスパラリンピックでゴルフが入るのでそれを目指したい。	「パラリンピックで金メダルを取りたい」という思いが強いので、2024年のパリ大会、2028年のロサンゼルス大会になるかわからないが、そこに対する情熱は常に持っている。
その他特記事項	・受傷前スポーツをやっていたことは、スポーツ(ボッチャ)を始める際にはプラスに働いていると思う。 ・講演やデモンストレーションで小学校などに行って「すごい」と、子どもたちに言われるととても嬉しい。ボッチャを通して外(他人)との関わりが持てることがとても大きい。 ・両親も年齢を重ねてきたのでどこかで介助者をチェンジしなくてはいけない。最近では、ヘルパーをお願いしている。	・パラリンピック国内開催により、企業の注目も上がり、プロとしての活動が可能になっている。 ・今後はプロの指導者としての活動の在り方を模索。 ・同様の障害を持っている子どもたちには、体育の授業で競技用義足が使える環境を整備すべきという意見が聞かれた。 ・パラスポーツ普及には、パラリンピック終了後に引退する金メダリストがいれば、テレビ出演等露出が多くなり、普及につながるという意見を述べられた。	・競技開始当初、十分な支援を受けられていなかったが、競技実績を積み上げると同時に、東京パラリンピック招致の影響等により、金銭的な支援や練習環境は充実してきている。 ・強化指定選手への支援は充実してきているが、若手への支援が十分ではなく、用具や金銭的な支援が必要である。 ・引退後も車いすラグビーの魅力を発信する活動を続けていきたいと考えている。

項目	21-D	21-E	21-F
調査年度	21	21	21
識別記号	26	27	28
生まれた年	1980	1991	1979
性別	男	男	男
居住地域	甲信越	関東	関西
調査時身分	選手雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	18	15	0
障害内容	肢体	肢体	肢体
障害程度	中度	中度	重度
学校種別	普通	普通	普通
現在実施競技	陸上競技	陸上競技	車いすバスケットボール・パラクライミング
競技開始年齢※	19	16	13
レベル	国際入賞	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者※	・主治医 ・義肢装具士 ・コーチ ・看護師(のちの妻)	・入院先の義肢装具士 ・高校の体育の教員	・母親 ・子どもたち対象の視覚障害のクライミング体験を実施した時に、講師として招聘した視覚障害クラス日本代表(パラクライミング)
パラスポーツ開始場所※	・大学の陸上部	・高校(陸上部)	・市民体育館
パラスポーツ情報提供者※	・主治医 ・義肢装具士	・義肢装具士 ・入院先のリハビリに携わっていた先生方	・母親
パラスポーツ開始場所へのアクセス※	・本人	・本人	・母親
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・なし	・なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	・経済的基盤となるスポンサー(所属企業)等の出現	・同じ義足の陸上選手 ・現在の所属先 ・障害のない仲間たち ・義足メーカー	・大学時代の同級生(現:選手兼ヘッドコーチ) ・子ども対象の視覚障害のクライミング体験をした際、講師だった視覚障害クラス日本代表選手 ・応援してくれる人、応援したい沢山のクライマー
パラスポーツ継続状況	・場所:大学でやっていた時は毎日練習したい時に大学施設が使えた。地元に戻ってきてからはそれが難しい。 ・指導者:競技を行う時期によって義肢装具士が重要な他者であった時期もあるし、その後は競技のコーチの重要性が高まってきた。競技コーチは2004年以降指導してもらっている。	・2016年から現在の所属へ転職し、所属先の支援を受けながら競技を継続。 ・現在は、週5日ほど師事しているコーチが主宰しているクラブで、障害のない選手とともに練習、トレーニングを行っている。	・車いすバスケットボールは週に2〜3日程度、パラクライミングは週3日程度練習をしている。 ・仕事と競技を両立しており、パラクライミングに関しては日本代表の活動で海外遠征の機会があり、有志の寄付等はあるものの勤務先や協会からの支援はなく、国際大会へのエントリーを増やしたいと考えているが苦慮する部分がある。
支援	・勤務先	・勤務先	・なし
将来ビジョン	・今後も現役を続けるが指導者としての道も切り拓きたい。指導者としても勉強をしながら、選手とともに高めていきたい。さらに、一般の人と同じ土俵でマスターズでの競技(義足側で踏み切らなければ出場できるという約束を取り付けている)を考えている。	・100mを10秒台で走る。 ・「パラ陸上選手」ではなく「陸上選手」として認められたいという思いがあり、純粋に足が速くなりたい。	・車いすバスケットボールに関しては「日本選手権で何位になる」といった目標はなく、求められるうちは続け、年を取ってからもシニアチームから声がかかれば参加したい。自分自身の「居場所」であり、楽しくバスケットボールを続けていきたい。 ・パラクライミングに関しては、2023年の世界選手権(スイス)で金メダルを取りたい。また、パラリンピックの追加種目になるため、競技人口を増やすべく国内外で普及に関わる活動をしていきたい。
その他特記事項	・急性期、リハビリ期を担当する医師がパラスポーツの知識を持っていることは非常に大きい。予後にスポーツを実施することを想定した手術や治療ができる。 ・スポーツ継続に関して、自らスポンサー探し・契約をするなど主体的な活動の成果がここに見られる。 ・パラスポーツ普及には、障害を持ったあとも地元でスポーツができる受け皿が必要。施設や指導者がいても仲間がいないとなかなか続かないと考えている。	・競技用義足は高価であり、これからスポーツを始める人を対象とした支援制度が必要ではないだろうか。 ・高校、大学と陸上部で競技を継続し、仲間たちが自分を特別扱いせず接してくれたことが、楽しく陸上を続けてこられた一因であった。 ・義足に関しては知識を持った医師や義肢装具士等に出会えるかどうかとも重要であり、足の切断についてもスポーツに適した・適していない方法があるので、適切な医療職と出会えるかどうかとも非常に重要である。	・障害のある子どもたちがスポーツを始めるにあたって、特別支援学校や特別支援学級、病院等への情報提供が十分ではなく、上手くマッチングできていない印象を受ける。 ・「いいね、やってみよう」と言ってもらえるような、「否定しない大人」に出会えるかどうかが必要である。

項目	21-G	21-H	21-I
調査年度	21	21	21
識別記号	29	30	31
生まれた年	1998	1990	1966
性別	女	男	男
居住地域	関西	関東	東海
調査時身分	選手雇用	選手雇用	その他
障害発生年齢	14	21	30
障害内容	肢体	肢体	視覚
障害程度	中度	中度	重度
学校種別	普通	普通	普通
現在実施競技	陸上競技	陸上競技・スノーボード	柔道・陸上競技・自転車競技・水泳
競技開始年齢※	15(高校1年)	24	31
レベル	国際入賞	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者※	・医師 ・同じ切断の陸上競技選手 ・両親 ・SEKAI NO OWARI	・リハビリテーションセンターPT ・義肢装具士 ・ランニングクリニックで出会ったパラリンピアン	・公民館で柔道を教えていた先生 ・自分の子どもたち
パラスポーツ開始場所※	・地元の義足の人の陸上競技クラブ	・東京にある切断の陸上競技クラブ(都内陸上競技場)	・町の柔道場(公民館)
パラスポーツ情報提供者※	・同じ切断の陸上競技選手	・リハビリテーションセンターPT ・義肢装具士 ・ランニングクリニックで出会ったパラリンピアン	・市役所
パラスポーツ開始場所へのアクセス※	・本人	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・なし	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・同じ義足の走り幅跳び競技者 ・ライバルの存在	・一緒に練習をしているパラリンピアン ・妻 ・所属会社	・妻 ・子ども ・使用するスポーツ施設スタッフ
パラスポーツ継続状況	・大学1年次に2016年リオパラリンピック出場 ・その後走り幅跳び専門のコーチに師事 ・高校3年生の時から企業と契約し、プロとして活動 ・21年4月からS社所属 ・練習期は午前中に練習、午後ウェイトトレーニングやプール。出社する日は週1回、午後2時半まで仕事、その後練習。 ・コロナ前だと、年間10〜20試合くらい、海外遠征は年に3回くらい。多い時で4回。	・現在は競技中心の生活。 ・月・水・金・土が午前中走る練習。月・火・水・金・土に午後、ウェイトトレーニング。火曜と木曜はプール。日曜はオフ。 ・コロナ前であれば年間6〜7試合、スノーボードは1試合出場。 ・現在所属の会社の理解が大きい。練習環境のサポート、社員の応援など。	・視覚障害者となったあと、柔道を再開。シドニーパラリンピックで入賞。その後、自転車や陸上競技(投擲)を実施。 ・練習場所(柔道、自転車、陸上、スポーツクラブ)について、障害を理由に拒否され続けたが、何度も通い人間関係を構築するなど粘り強く交渉し、最終的に使わせてもらえるようになった。 ・妻が働き生活を支えてくれているので、競技に専念している。現在は、投擲専門の指導者に指導してもらっている。
支援	・勤務先、スポンサー	・勤務先	・なし
将来ビジョン	・陸上は自分の体が「あ、もう無理や」と思うまでやりたい。 ・東京大会が終わって悔しい気持ちがあるのでパリこそはと思っている。それが終わればきっとロスこそはと考えていると思う。	・今後とも夏と冬の競技を続けていきたい。もっとレベルを上げたい。ライバル選手を超えたい。 ・引退後は子どもたちの指導・育成ということがあるかもしれないが、それをやるのにもまずは今の競技力をアップさせしっかりと結果を出すことが大切だと考えている。 ・今の会社は非常に理解があるので、スポーツを通じた社会貢献を会社所属でやるのではと今は考えている。	・105歳までにマスターズで記録を残すことが目標。その年齢まで面倒を見てくれるスポンサーも探す。 ・60歳になったら一般の大会の投擲5種に出ようと思っている。ハンマー投げはやっていないのであと5年間で練習する。105歳で健康者の大会に、アイマスクをして出る。
その他特記事項	・受傷後、非常にスムーズに競技に入ることができている。その要因として、担当医師が障害者スポーツに関する知識を持っていたこと、ロールモデルとなる同じ障害のある選手と出会い、様々なアドバイスをしてくれたこと、地元で切断者のための陸上競技クラブがあったこと、一般高校の部活動で受け入れてもらえたことなどが挙げられる。 ・競技の継続に関してはスポンサーの存在、同じ所属会社の選手の存在が非常に大きい。 ・現在23歳と若い。陸上競技はもちろんだが、切断ヴィーナスのファッションショーに出演したり、雑誌を作ったり、絵本を描いたりマルチに活躍しているところが特徴的である。	・受傷後のリハビリ施設が国立リハビリテーションセンターだったこともあり、スポーツに関する情報が多く取れ、スポーツ開始に繋がっている。 ・競技用義足を借りることができたことも競技生活の入り口にあっては大きかった。 ・スポーツ競技の継続に関しては所属会社からの経済的な支援や競技に専念できる環境づくりに対する支援があることが大きい。 ・また、目標となる選手の存在や家族の支援があることも重要であることがわかった。	・障害を持ってからのスポーツ開始には、自治体の情報提供制度や障害者スポーツ協会の存在が影響している。情報提供に終わらずスポーツの場へのつながりが重要であることが明らかである。 ・何より本人のやりたい気持ち、自ら動く行動力が大きく影響している。受け入れてもらえないスポーツ施設、クラブのメンバーに対しても声を荒げることなくコミュニケーションをとり、最終的に受け入れてもらえるようになっている。 ・「105歳までスポンサーをつけて一般の大会に出る」という今後のスポーツ活動の見通しはこれまでにはなく、一つのモデルになる可能性を秘めている。

項目	21-J	21-K	21-L
調査年度	21	21	21
識別記号	32	33	34
生まれた年	1959	1961	1976
性別	男	女	男
居住地域	東海	関西	東海
調査時身分	一般雇用	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	52	0	17
障害内容	肢体	肢体	視覚
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通	特支→普通	普通→特支
現在実施競技	アーチェリー・フライングディスク	バドミントン	柔道・柔術・グラップリング
競技開始年齢※	55	45	16 ※同じ高校で発症前から継続
レベル	全国出場	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者※	・医師 ・妻 ・県障害者スポーツ協会職員 ・フライングディスクの指導者	・会社の同僚(パラバドミントン日本代表選手) ・地域のバドミントンコーチ	・高校の柔道部の恩師
パラスポーツ開始場所※	・障害者スポーツ協会(体育館等)	・障害者スポーツセンター	・高校の柔道場(部活動の継続として)
パラスポーツ情報提供者※	・県障害者スポーツ協会職員 ・フライングディスクの指導者	・会社の同僚(パラバドミントン日本代表選手) ・地域のバドミントンコーチ	・盲学校
パラスポーツ開始場所へのアクセス※	・本人	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・なし	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・現在の職場の上司	・地域のバドミントンコーチ ・パラバドミントン全日本コーチ	・助言をくれた先生(視覚障害者柔道パラメダリスト) ・妻や子どもたち ・視覚障害を持つ職場の同僚の先生や生徒
パラスポーツ継続状況	・52歳で受傷後、2014年頃からフライングディスクとアーチェリーを始める。 ・初級スポーツ指導員とフライングディスク指導員の資格も同時期に取得。 ・全国障害者スポーツ大会(2014年長崎・2015年和歌山)に出場。 ・2017年に2度目の事故にあい、その後アーチェリーを本格的に実施。 ・現在、火、水、土、日は競技に専念できている。 ・東京パラリンピック開催により指導する場を多く持つことができている。	・バドミントンを始めた頃から、地元のコーチが熱心に指導してくれたことで、バドミントンが楽しく、上達も早かった。 ・車いすバドミントンを行う選手は少なく、競技を始めてから1年で国際大会に出場した。同じクラスの海外選手の存在、圧倒的な強さに刺激を受け、もっと強くなりたいと練習を重ね、強化合宿などで全日本コーチから指導を受けた。バドミントンがパラリンピック正式競技に決定したあと(5～6年前)、アスリート雇用となった。 ・昨年、アスリート雇用は終了したが、地元の次世代アスリートの育成を行いつつ、バドミントンを継続している。	・高校入学後に始めた柔道だが、視力低下後、自分を取り巻く環境が変化していく中でも、視覚障害者柔道は、組めばこれまでと同様に柔道ができた。周囲が視覚障害であることを忘れるくらい普通に接してくれたことで、自己肯定でき柔道が支えとなった。 ・視覚障害者柔道は、パラ大会(アテネ・リオ)出場、リオ大会でメダルを獲得して引退。 ・現在は、後進の指導に役立つと思い、柔術とグラップリングの道場に通っている。
支援	・勤務先	・勤務先	・勤務先、公的機関
将来ビジョン	・自分でアーチェリーやフライングディスクを続け、パラリンピックを目指すと同時に、競技を広く普及していきたい。 ・アーチェリーやボッチャ、フライングディスクも障害があってもなくてもすることができる。教室等を通じて障害のある人となない人の壁がなくなっていけばいいと考えている。若い人たちにそうしたことを伝えていきたい。	・地元の次世代アスリートの育成を行いながら、練習を継続していく予定。 ・スポーツを始める際には、まずはやる気が必要。指導者も体験に来た人をやる気にさせることが重要。バドミントンは、体育館の予約が取れば練習が出来る。また、一緒にバドミントンを行う仲間がいいると継続に繋がる。	・後進の指導に役立つと思い、柔術とグラップリングの道場に通っている。
その他特記事項	・野球で培った地肩の強さや以前に経験した射撃の訓練等が現在のスポーツ活動にも好影響を与えている。(幼稚園～高校まで野球。高校卒業後～27歳まで自衛隊に。27歳以降も野球はやっていた。) ・事故で受傷後、手術等を何度も繰り返している。社会復帰していくために必要な条件としての体力向上のためにスポーツを始めた。 ・現在、会社で障害者スポーツを実施し、普及活動をするを業務として認められている為、競技を存分に行うことが出来ている。	・中学校でソフトボール部に所属したが、卒業後は44歳までスポーツをする機会に恵まれなかった。 ・バドミントンを始めるにあたって影響を与えたものとして、パラバドミントンの日本代表選手、地域のバドミントンコーチ、障害者スポーツセンターの存在がある。 ・国際大会での海外の同じクラスの選手との出会い、全日本コーチから指導を受けたこと、継続的な地域コーチのサポートが競技レベルの向上や意識に影響した。	・発症前から柔道の楽しさを知っていたため、発症後でも楽しく取り組むことができた。 ・視覚障害者柔道は組めば障害の有無にかかわらず取り組める競技のため、発症後、出来ないことが増えていく環境下において、心の拠り所となり、自己肯定に繋がった。 ・自己受容はできていないが、柔道を通して、障害は不便だけど不幸ではないと思えるようになった。

項目	21-M	21-N	21-O
調査年度	21	21	21
識別記号	36	35	37
生まれた年	1981	1981	1980
性別	男	男	男
居住地域	関西	東海	関東
調査時身分	一般雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	26	32	16
障害内容	肢体	肢体	肢体
障害程度	軽度	中度	重度
学校種別	普通	普通	普通
現在実施競技	スノーボード	スノーボード	スノーボード
競技開始年齢※	23(障害発生前から同一競技を実施)	20(障害発生前から同一競技を実施)	21
レベル	国際入賞	国際入賞	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者※	・インターネット	・大腿義足の友人スキーヤー ・義肢装具士 ・会社の社長	・アルバイト勤務先の社長と弟 ・ジャンプ台をきれいに飛んでいた名前を知らない選手
パラスポーツ開始場所※	・スキー場	・元々のホームグレンデ	・スキー場
パラスポーツ情報提供者※	・インターネット	・大腿義足の友人スキーヤー ・義肢装具士	・当時のアルバイト先の社長
パラスポーツ開始場所へのアクセス※	・本人	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・職場の理解 ・家族(妻) ・憧れの存在(同じ日本代表チーム)	・妻 ・会社の社長 ・代表チーム(コーチ、チームメイト)	・同年代の義足の日本代表チームメイト(憧れの存在) ・海外の有名選手
パラスポーツ継続状況	・教師をしているため基本仕事を中心。冬場は仕事終わりに近くのグレンデに行ってナイターで練習をする。夏場は週末などに芝の練習場や人工雪の練習場に行って練習をする。今年はヘルニアのため夏場はジムで筋力トレーニング中心。 ・公立学校教員ということもあり、他の選手のように海外遠征に多くはできない。基本的には有休を使う。事前に計画を立て、多くの先生方に配慮していただいている。管理職も理解がある。年間10日から2週間ぐらいの海外遠征が2〜3回。コロナの影響で、帰国後隔離が入るが特別休暇等の扱い。 ・国内の合宿も同じぐらいの日数を使うが、自分は週末だけの参加。海外遠征で2大会ぐらいに出場しポイントを取ってくる。	・事故後(32歳)、自分は義足になると思い、何ができるかと考え「スノーボード」だと思った。スノーボードは小5から、競技は大学2年からやっていた。 ・退院後も1か月の自宅療養のあと、1日30〜40キロのサイクリングに挑戦するなど、アクティブな療養期間を過ごす。 ・週1回室内のハーフパイプ(3時間)、週3〜4回人工芝のジャンプ練習場(30〜40分)、週2回ジム、これからは雪の上や遠征が増える。 ・指定強化選手で、アスリート助成を受けている。会社の理解もあり、アスリート雇用として競技に専念できる。	・現在は、スノーボードクロスの日本代表強化指定選手として活動が続ける。 ・日本の雪は柔らかく、コースを作っても溶けてしまうことから、スノーボードクロスの常設コースは存在しない。そのため、国内で練習するにあたっては、大会用に臨時で設置されるコースの情報を集めて、大会開催の前後の期間で練習する形式で国内のコースを転々とする。一方で、海外では常設コースがあるため、スキー場で利用料を支払えば練習が可能である。
支援	スポンサー・公的機関	・勤務先、公的機関	・勤務先、公的機関
将来ビジョン	・日本代表チームに入っているが、その中でも勝っていかないとパラリンピックには出られない。2021年12月まで争って残り1枠を取りたい。 ・腰のヘルニアのこともあり、北京パラリンピックを区切りにしたいとは思っているが、今悩んでいる。 ・自分の思った通りの結果が出ればいいが多分難しいので、そうするとその次もという考えもある。 ・スノーボードは死ぬまでやる。指導者は求められればやると思う。	・当分引退は考えていない。 ・元プロスノーボーダーなので、ライセンスの再取得を目指している。	・2022年の北京大会、2026年のイタリアのミラノ/コルティナ・ダンベッツォ大会まではスノーボードで、それ以降は障害者ゴルフをしていくことで所属先企業と話をしている。 ・スノーボードを引退していた時期に、妻と共通の趣味であるゴルフを始めた。
その他特記事項	・障害を持つ前からスノーボードをやっており、受傷が競技継続に大きな障害とはならなかったことが同一競技を継続できた要因。障害を持つことでこれまでの生活や競技生活が分断されるということがないという、これまではなかったキャリアパターン。 ・公務員をしながら冬季競技をトップクラスで継続するのは相当大変なことだと考えられるが、職場の理解と支援が大きく、可能にしている。 ・日本代表チームの人間関係が非常によく、お互いを刺激しあって伸びていっている雰囲気があり、これが競技継続の大きな要因。 ・2020パラリンピック東京大会決定後、アスリート助成等の制度ができ、経済的な支援も受けられるようになったことも継続の要因。	・事故で切断後すぐに義足で何ができるかを考え、もともとしていたスノーボードならできると思った。当時パラリンピックの正式種目に採用されたことで、パラリンピックに出るという目標ができた。 ・友人に同じ大腿義足のスキー選手がいたことで、義足で生活すること、スポーツをすることに對する不安を感じなかった。 ・東京パラリンピック開催決定後の各種助成制度がスポーツ継続には好影響である。	・スノーボードを始める・継続するきっかけも、自分が目にしたジャンプが格好良くて感動し、それを自分でやってみたいという思いで無我夢中で練習して、できるようになっている。 ・国内でスノーボードが競技として認められず一度は競技から引退するが、10年後に競技として認められたことで、現役復帰。 ・2019年より所属先企業がアスリート活動を全面的に支援してくれることで、国内に存在しない常設コースを海外遠征で回ることが可能となった。

項目	21-P	21-Q
調査年度	21	21
識別記号	38	39
生まれた年	1985	1982
性別	女	女
居住地域	関西	関西
調査時身分	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	0	18
障害内容	視覚	肢体
障害程度	重度	中度
学校種別	普通	普通
現在実施競技	水泳	シッティングバレーボール
競技開始年齢※	2(パラ競技としては19)	19
レベル	国際出場	国際入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者※	・視覚障害のある子どもの保護者 ・地元の障害者水泳のクラブのチームメイトとコーチ	・障害者スポーツセンターの指導員 ・母親 ・一緒に練習するクラブの仲間
パラスポーツ開始場所※	・地元の障害者水泳のクラブ	・障害者スポーツセンター
パラスポーツ情報提供者※	・ボランティア先の同じ障害の子ども之母親	・広報誌 ・障害者スポーツセンターの指導員
パラスポーツ開始場所へのアクセス※	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・なし	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・地元の障害者水泳のクラブの存在(専門のコーチの指導が受けられる)	・日本代表監督 ・両親や家族
パラスポーツ継続状況	・競技を始めた頃は地元Bクラブのみ週3日程度練習していた。北京パラリンピック出場決定後、練習量を増やすために地元クラブと並行し民間のスイミングスクールの選手コースで練習をするようになった。現在も同環境で週4～5日程度練習している。 ・Bクラブの存在がとても大きい。コーチは、個々の障害に合わせて一人ひとりの能力をどのようにすれば引き出せるかということを考えて指導してくれた。 ・大学卒業後、現在の所属先に就職し、当初フルタイムで働いていたが、会社との話し合いで時短勤務が認められるようになり、現在は午前中の半日勤務、午後は水泳に関する活動に充てられるようになった。また、競技に関する経費については、給与とは別にすべて会社の負担。	・通い始めたシッティングバレーボールクラブでは、日本代表選手と一緒に練習をしていた。同じ年代の仲間もいたことで楽しく続けることができた。 ・障害者スポーツ指導員から専門的な指導を受けたこと、バレーボールの経験があったことから、シッティングバレーボールを始めて1年余りで日本代表に選出。その後、日本代表監督からの指導を受け、2008北京、2012ロンドンと2大会連続でパラリンピックに出場。 ・アスリート雇用ではなかったため、遠征費や合宿の費用は自費だったが、2008年の北京大会後からは少しずつ自己負担が減っていった。2019年に引退し、アシスタントコーチとして選手を支えている。
支援	・勤務先	・公的機関
将来ビジョン	・以前は「パラリンピックを目指さなければいけない」と思っていたが、最近は自己ベストを出したいという意識が強くなってきている。中学校・高校時代の純粋に水泳が楽しかった当時を思い出して、タイムにこだわっていきたくと考えている。 ・「パラ水泳」というよりも「水泳」そのものが好きなので、一度原点に立ち返って楽しんでいきたい。 ・また、指導者に以前から興味を持っており、競技と並行してまずはお手伝いのような形で関わっていただければいいと考えている。	・2019年からアシスタントコーチとして関わっている。シッティングバレーボールがメダルを獲得し、結果を残すようになれば認知度も上がり、スポンサーなどからの支援も受けられる。 ・現在、コーチなどサポート体制は整ってきているため、練習する機会を増やしていけば、もっと強くなると思う。
その他特記事項	・親が障害と向き合って、自分の子どもの障害はどのようなものなのかについて、もう少し調べてほしいと感じている。 ・定期的に検査で病院に通っていたが、自分が障害者手帳を取得できる事を教えてもらえなかった。障害者手帳を取得できたことを知ったのは、大学受験の相談時、通っていた病院の医師や視能訓練士がもう少し早く対応をしてくれていたら良かったと感じている。 ・自分と同じような障害のある人々がスポーツを始めるにあたっては、弱視のような見えづらい障害に対する、学校関係者、医療関係者や周囲の人々の理解が重要であると思う。	・スポーツを始める際には、スポーツ指導員やリハビリ現場の関係者などが様々な障害者スポーツを知っていること、声をかけることが重要。 ・一般のスポーツセンターなどに障害者スポーツの一覧が記載されている冊子などがあれば知るきっかけになると思う。もっと広く、シッティングバレーボールを知ってもらえる機会を作っていく必要がある。

仮名 21-A さん

インタビュー実施日時 2021 年 8 月 26 日 13:00-15:00 場所 オンライン

個人基本情報	居住:東海地区 生年月日:1990 年 性別:男性 障害発生年齢:19 歳 障害内容:頸髄損傷 リハビリ期間:2 年 4 か月
略歴	地元工業高校卒業後、オートバイメーカーに就職、就職 1 年目にバイクでツーリング中に事故にあう。頸髄損傷による上下肢機能全廃。リハビリ終了後、地元、福祉系大学へ入学。大学を卒業後、リモートワークのできる会社に就職、約 1 年で現在の会社に転職。現在リモートワークでフレキシブル勤務をしている。障害は 1 種 1 級。現在、H 市に両親と在住。ボッチャのほかにスキューバダイビングやパラグライダーもやることがある。
競技基本情報	競技:ボッチャ クラス分け:BC3 主な戦績:日本選手権ベスト 4 競技開始年齢:22 歳
障害発生から 障害者スポーツ開始まで	経緯: ・19 歳の時に障害を負う。急性期は地元の病院に 3 か月入院、その後 N 市内のリハビリ病院に転院し、約 2 年間を過ごす(交通事故のため保険があり、半年以上病院でリハビリを行えた)。そのあと静岡県のリハビリ施設に入所し、1 年ほどを過ごす。 ・市の病院の OT(作業療法)では自分がやりたいことを主体的に選択(例えばプラモデルを作る)でき、「自分で挑戦していいんだ」ということが学べて良かった。 ・県のリハビリ施設では、電動車いすの操作方法などを覚えた。 ・最初、県のリハビリ施設に行くのが嫌でスタッフとぶつかったりもしたが、他の入所者が努力している姿を見て、考えが前向きに変わってきた。 ・施設ではカリキュラムの中に体育があって、初めは車いす操作などを練習した。そのことが日常生活やボッチャの中で活かされている。 ・他の入所者は、ツインバスケをやっていたが、自分は障害が重いためスポーツに参加できずモヤモヤしていた。リハビリ施設を退所してから自分でできるスポーツを探したりした。 ・自宅に帰った後、スポーツをしたいと思い、S 県の施設で知っていた地元ツインバスケチームに見学に行った時、チームの選手からボッチャなら

	できることを教えてもらった。 ・市の障害者スポーツ大会の昼休みにボッチャの体験会(地元ボッチャクラブに連絡し紹介された)があり、参加。その後このボッチャクラブに入会した。 ・地元ボッチャクラブで月に2回、1回3時間程度、10人程度が集まってやるようになった。 始めた場所:地元ボッチャクラブ(場所は市内公共センター) 重要な他者: ①リハビリ期 家族(両親) ②ボッチャ開始期 見学に行ったツインバスケットの選手、地元ボッチャクラブ
障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件	・リハビリテーション施設で知っていたツインバスケットを見学に行った際、ボッチャを紹介してもらったことでボッチャへと導かれた。 ・居住地近くにボッチャクラブがあったことが大きく影響している。
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	・小学校の時は、学校のスポーツクラブ、中学の時は男子バレーボール部、高校ではアーチェリー部に入っていた。アーチェリー部では県3位で、全国高校選抜の選手に選ばれた。 ・受傷前スポーツをやっていたことは、スポーツ(ボッチャ)を始める際にはプラスに働いていると思う。まだ、ボッチャで結果を出せていないので、胸を張っていい影響があったかどうかは分からない状況。
障害者スポーツ継続に関する状況	継続状況: ・ボッチャの結果で、支援してくれている親(とりわけ父親)に恩返しをしたいという気持ちがある。他には、自分を成長させたい(修行)という面もある。 ・ボッチャは、運動をしてきたこともあり、すぐに感覚をつかむことができた。しかし、うまくいかない場面も多々あり、やめたいと思ったことは何度もある。でもやめると他のことでも逃げることになると思い、成長への修行だと思っている。

	・現在、週末の土日に練習 1 回 4 時間程度している。大会にはコロナがなければ年に 2～3 回出ている。 ・会社にはボッチャをやることを了解してもらっており、ボッチャの活動も勤務時間とみなしてもらっている。 ・講演やデモンストレーションで小学校などに行って「すごい」と、子どもたちに言われるととても嬉しい。ボッチャを通して外(他人)との関わりが持てることがとても大きい。 ・継続していく上で大変なことは練習場所の確保(練習場所がない・少ない) 主な実施場所: 自宅、近隣の福祉法人が持つ体育館。廃校になった学校の体育館 重要な他者: 父親(ランプの製作や介助)、母親(ボール拾いなど)
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・影響を与えた社会的状況は、特にない。 ・近くにボッチャクラブがあること、子どもが減少したことで廃校になった学校(その地域に以前住んでいたことで住民が理解してくれた)や福祉法人が体育館を作った(体育館: 障害者団体のみ)ことは好影響を与えている。
今後のスポーツ実施	・ボッチャはこれからも上を目指して続けていく。 ・パリのパラリンピックに出場したい。 ・両親も年齢を重ねてきたので、どこかで介助者をチェンジしなくてはいけない。最近では、ヘルパーをお願いしている。
まとめ	・リハビリ期間に行った PT(理学療法)や OT(作業療法)内容がその後のスポーツや日常生活に役立っていると思われる。 ・同様にリハビリ期間において主体的に OT(作業療法)内容を決められるような状況の中で、自分で決めたりする主体的な行動が可能になった。 ・ボッチャとの出会いは、在住県のリハビリ施設 OB の紹介→地元ボッチャクラブが中心となっている。 ・ボッチャ継続にあたっては、両親の支援、自分を成長させたいという気持ちに加え、廃校になった学校の体育館、福祉法人の体育館の完成など

	がプラスに影響していると考えられる。 ・今後もより上を目指していきたいと考えている。そのためには父親に代わる介助者を見つけることが課題で、現在ヘルパーと連携しようとしている。
--	---

(藤田紀昭)

仮名 21-B さん

インタビュー実施日時 2021 年 9 月 27 日 13:30-15:30 場所 オンライン

個人基本情報	居住：関西地区 生年月日：1982 年 性別：男性 障害発生年齢：17 歳（高校 2 年生） 障害内容：左大腿切断 2 種 4 級 リハビリ期間：事故後、翌年 2 月くらいまでの約 1 年間（退院後も部活に行くような感じでリハビリに通っていた。）
略歴	高校2年時に事故で左足切断。高校卒業後、義肢装具士の専門学校に行き資格取得。2004 年 O 大学に進学。大学卒業後、2008 年に S 社に入社。2010 年 S 社に所属しながら大学院に進学。その後、2017 年 9 月に所属会社を変え、現在に至る。 2016 年に結婚。2 児の父。
競技基本情報	競技：陸上競技 短距離、走り幅跳び クラス分け：T63 主な戦績：パラリンピック夏 4 回、冬 1 回出場（リオ大会 メダリスト）、世界選手権メダリスト（2 回）ほか多数 競技開始年齢：20 歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯： ・入院時に医師にスノーボードをやりたいと言ったら、スキーならできるといふ返事もらった。その後、スノーボード雑誌でアメリカに義足のプロ選手がいることを知り、2000 年 12 月にはスノーボードをやった。日常用義足で兄に連れて行ってもらった。ボードの道具は以前からやっていたのであった。 ・翌年（2001～02 年にかけて）の冬には専門学校の I 先生がペンションを営んでいたのそこでスノーボードをしながら山籠もりした。ここで陸上競技もやってみたいという話をしたところ I 先生から陸上競技団体の情報をもらい、学校の近くの N 市のチームに連絡し、登録した。 ・リハビリの段階から走りたいという気持ちもあり、義足作製時から走れる義足にした。スポーツをやりたいという意思を伝えていたのでリハビリ時の義肢装具士と PT（理学療法士）が陸上（走り方）などスポーツに関する情報をくれた。2001 年 7 月に陸上の小さな大会が近くであり、出場したのが最初。 ・冬はスノーボードがあるが、夏に行うスポーツがなく筋トレだけやっていた。競技に出たいという気持ちもあり、時間的に制約が少ない個人競技

	である陸上を選択した。専門学校 3 年生の頃から陸上が中心となっていた。 ・2003 年 4 月、スノーボードをやっていて陸上の練習はあまりしていなかったにもかかわらず、100m でアテネパラリンピックの標準記録に 0.2 秒まで迫る記録(13 秒 9)が出た。本気でやればもっとやれるかと思い、軸足が陸上競技に移った。 ・走り幅跳びは 2003 年から始めた。翌年 10 月の記録会から義足踏切になった(記録が 50 cm くらい伸びた)。 ・2004 年専門学校卒業後、O 大学に進学、パラ陸上に理解のあった教員が陸上部の指導者でもあり、入学。 始めた場所:スノーボード:山(K スキー場) 陸上競技: N 市競技場(クラブメンバーとして) 重要な他者: ①リハビリ期 PT(理学療法士)、義肢装具士 ②開始期 PT(理学療法士)、義肢装具士
障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件	・アテネパラリンピック ・専門学校時、練習することができる陸上競技クラブが近隣にあった。 ・スポーツの知識を持った医師、PT(理学療法士)、義肢装具士
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	・小学校で野球、中高ではバレーボール、スノーボード
障害者スポーツ継続に関する状況	継続状況 ・専門学校:中部地区のクラブチーム ・大学:陸上部で他の学生と一緒に練習 ・S 社:午前中から午後 2 時まで勤務、母校の大学施設を利用して練習。その後、学生とともに 16~20 時まで練習。土日遠征も勤務扱い。遠

	征費等はほぼ会社がカバーしてくれていた。 ・現在：母校の施設で練習。(コロナ禍で)午前中練習、月・水・金は走って練習+午後・ウェイト、火・土はウェイト練習とプール。木はプールだけ。日曜は完全休養。午後は時に講演など。 主な実施場所：O 大学(母校の大学) 重要な他者：一緒に練習している学生たちとレベルが同じくらいの学生、陸上部指導者(大学・大学院の指導教員)、I 先生
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・記録がある程度出続けたということ。大学院で研究していることを試しつつトレーニングできたことがモチベーション維持に影響している。 ・大学卒業後も陸上競技場等、大学施設を継続的に利用でき、一緒に練習している学生の存在も含め、練習環境が充実している。 ・パラリンピック国内開催により、企業の注目も上がり、プロとしての活動が可能になっている。
今後のスポーツ実施	・会社に所属しつつ、指導者として後進の指導にあたれるといいと考えている。 ・ロサンゼルスパラリンピックにゴルフが入るので、それを目指そうと検討中。
まとめ	・スポーツに対する関心が受傷前から高く、受傷後もその関心の高さは変わりなく自らスポーツをやりたいことを医師やコメディカルに伝え、情報を提供してもらっていた。 ・情報提供してもらった後も自ら動き、スノーボードでの冬の山籠もり、陸上クラブへの入会から競技者登録等自ら行っていた。スポーツへのモチベーションが高いこと、それによりパラスポーツに関する情報を得、スポーツできる場所へ主体的にアクセスしているところが特徴と言える。 ・スポーツの継続に関しては母校の大学を拠点とした練習環境が充実していることが大きな特徴。 ・2017 年に所属会社が変わり、現在、プロアスリートとして活動している。今後はプロの指導者としての活動の在り方を模索しており、パラスポーツ界のフロンティアの一人と言える。 ・同様の障害を持っている子どもたちには、体育の授業で競技用義足が使

	える環境を整備すべきという意見が聞かれた。 ・パラスポーツ普及には、パラリンピック終了後に引退する金メダリストがいれば、テレビ出演等露出が多くなり、普及に繋がるという意見を述べられた。
--	--

(藤田紀昭)

仮名 21-C さん

インタビュー実施日時 2021 年 9 月 27 日 10:00-12:00 場所 オンライン

個人基本情報	居住:東海地区 生年月日:1985 年 性別:男性 障害発生年齢:19 歳 障害内容:頸髄損傷による上下肢機能障害 リハビリ期間:約 3 年
略歴	障害受傷後、リハビリテーションセンターで車いすラグビーを始め、介護施設事務職を経て、2021 年から現在の所属へと転職し、競技を継続している。
競技基本情報	競技:車いすラグビー 主な戦績:2012 年ロンドンパラリンピック 入賞、2016 年リオパラリンピック メダリスト、2021 年東京パラリンピック メダリスト 競技開始年齢:20 歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・小学校 2 年生から地元のスポーツ少年団でサッカーを始め、高校まで部活動で続けた。大学入学後は高校時代の友人が作ったフットサルチームの活動に参加。 ・大学生の時にプールでの事故で頸髄損傷を負い、地元の病院に 2 か月ほど入院後、リハビリテーションセンターに 1 年半ほど入所し、その後転院した I リハビリテーションセンター(以下、I センター)で、スポーツ訓練の一環としてツインバスケットボールを行うようになった。1 か所目のリハビリテーションセンターを退所する頃には、「(障害を負った)自分の体がどういうもので、これからずっと車いすと付き合っていかなければならない」と自覚していたので、この体でもできる運動はないかと考えていた。その中で I センターを紹介され、ツインバスケットボールに出会うと同時に、リハビリテーションプログラムの一環としてスポーツが積極的に導入されていた。子どもの頃からスポーツに取り組んできた自分としてはとてもありがたい環境であった。 ・I センターを退所後、職業訓練を行うために K リハビリテーションセンター(以下、K センター)に入所し、センター内にツインバスケットボールと車いすラグビーのクラブがあり、週に 2 日ほどセンター内で練習に取り組むようになった。

障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・障害受傷後に車いすラグビーを始めるにあたり、I センターでの経験がとても大きかった。K センターはスポーツ訓練に力を入れており、センター内の記録会(3 分間で何m走ることができるか等)で、自分と同じ頸髄損傷者のランキングが掲示されており、競争心を掻き立てられた。1日の日課として理学療法・作業療法・パソコン作業等があったが、以前入所していたリハビリテーションセンターで行っていた内容が多く、代替のプログラムとして様々なスポーツを行うことができ、とてもありがたい環境だった。また、当時「マダーボール(筆者補足:2005 年にアメリカで公開された車いすラグビーのドキュメンタリー映画)」の DVD を見たのが車いすラグビーを知るきっかけであった。 ・I センターでスポーツ指導を担当していた先生が、当時、車いすラグビー日本代表の強化に関わっており、自分の体の状態を見て、「C さんだったら車いすラグビーができるよ」と言われ、その後、I センターで開催された車いすラグビーの体験会で当時の日本代表選手と出会い、「もし、K センター(C さんがその後入所するリハビリテーションセンター)に来るようであれば、一緒にプレーできるのを楽しみにしているよ」と声をかけてもらい、今後の目標となるような選手たちと出会えたことがとても印象に残っている。K センターでは車いすラグビーとツインバスケットボール両競技に取り組んでいたが、世界を相手にしている日本代表選手が身近にいたということが、車いすラグビーに本気で取り組んでいきたいと思えるようになった要因であると思う。 ・自分と同じような障害のある人がスポーツを始めるにあたり、まずはどこにコンタクトを取ればよいかわからないと思うので、各競技団体や都道府県の障害者スポーツ協会等が窓口となって、始めたい競技のチームや関係者に繋ぐことのできるネットワーク作りが大事だと思う。また、公式の窓口だけでなく、医療職とチーム関係者とのつながりが非常に大事であると思う。自分自身も実際にお世話になった理学療法士、作業療法士、先生等から「同じような状態の子がいるから会いに来てほしい」と言われることがあり、このようなきっかけで競技を始める人もいるので、個と個のつながりも非常に大事であるのではないだろうかと思う。
------------------------------------	---

受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	・チームスポーツ(サッカー)をやってきたので、車いすラグビーをプレーする上での、スポーツの見方やコートを俯瞰して見られるといった点は障害受傷前のスポーツ経験が活きていると思う。
障害者スポーツ継続に関する状況	・2008 年から関東の車いすラグビーチームでプレーを始め、2018 年頃から西日本のチームに移籍し、2011 年から現在まで日本代表選手として活動している。現在は週 3～5 日程度、日本財団パラアリーナで関東圏のチームのメンバーと練習をすると同時に、月に 1 回程度所属チームの練習に参加している。 ・K センターを退所後、介護施設の事務職として就職し、2021 年 6 月から現在の所属に転職し、嘱託社員として競技を優先する形で勤務。
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・これまで競技を続けてこられたのは、金銭的な支援体制が整ってきたことが大きいと感じている。 ・競技を始めた当初、遠征や合宿費用はほぼ全額自己負担となっており、金銭的な負担が大きいことから、数年間強化指定選手としての活動を控えていた時期があった。また、ラグビー用車いすは非常に高額で、競技を始める、続けていくために車いすの確保は非常に重要であると思う。K センター入所時はセンター所有の車いすを借りていたが、退所後チームに所属する際に、運よく車いすを買い替える選手がおり譲り受けることができた。競技をこれから始めようと思う人がタイミングよく車いすを入手できれば良いが、もし手に入らなければ、「やる気はあるのに車いすがない」という状態になってしまい、競技開始・継続の大きな障害になってしまう。 ・日本代表として本格的に活動を始めた時期が、東京パラリンピック開催に向けての支援拡充の時期と重なっており、金銭的な支援や練習環境(特に日本財団パラアリーナの定期的な使用)は充実してきており、恵まれている方だと感じている。また、数年前から居住する県から強化費の支給を受けている。日本代表の活動に関する自己負担はなく、チーム練習や車いす等の用具に関する支出のみ自己負担となっている。このように支援が充実してきていることに関しては、単に東京パラリンピックの招

	致決定だけでなく、車いすラグビー界として世界選手権やパラリンピックでのメダル獲得等の実績を上げてきたことが重要であったと考えている。 ・競技継続にあたって障壁となる点について、我々のような強化指定選手ではなく、これから本格的に取り組んでいく、競技を始めたばかりの選手たちに対する支援が十分ではないと感じている。車いすラグビーは全都道府県にチームがあるわけではないので、遠方への練習参加時の交通費や遠征費等の補助が必要ではないだろうか。また、競技用の車いすが非常に高価なので、連盟や県障害者スポーツ協会等が数台でも車いすをレンタルするシステムができれば競技に取り組みやすくなると考えている。
今後のスポーツ実施	・「パラリンピックで金メダルを取りたい」という思いが強いので、2024 年のパリ大会、2028 年のロサンゼルス大会になるかわからないが、そこに対する情熱は常に持っている。 ・現役選手としては体力が続く限り、自分と同じクラスの国内選手や海外選手と渡り合えるうちは続けていきたいと考えている。 ・現役中も引退後も車いすラグビーの魅力を発信する活動は続けていきたい。特に地元の障害者スポーツ協会とは良い関係を築けているので、講演会や体験会等の活動を積極的に行っていきたい。
まとめ	・リハビリテーションセンターの運動指導士、当時の日本代表選手との出会いで車いすラグビーを始めた。 ・競技開始当初、十分な支援を受けられていなかったが、競技実績を積み上げると同時に、東京パラリンピック招致の影響等により、金銭的な支援や練習環境は充実してきている。 ・強化指定選手への支援は充実してきているが、若手への支援が十分ではなく、用具や金銭的な支援が必要である。 ・パラリンピックでの金メダル獲得を目指して、体力の続く限り競技を続けていきたい。 ・引退後も車いすラグビーの魅力を発信する活動を続けていきたい。

(河西正博)

仮名 21-D さん

インタビュー実施日時 2021 年 9 月 29 日 15:00-17:00 場所 オンライン

個人基本情報	居住:甲信越地区 生年月日:1980年 性別:男性 障害発生年齢:18 歳 障害内容:右下肢切断 T44 2 種 4 級 リハビリ期間:約 1 年
略歴	大学入学直前に受傷。大学卒業後、母校の科目履修生としてアテネパラリンピックに出場。その後結婚。その後、自らスポンサーを集め、2005 年 4 月からプロアスリートとして活動、芸能プロダクションにも所属(2004 年)。スポンサーがない苦しい時期もあったが、アルバイト等でつないだ。2009～2015 年はスポーツメーカー契約社員。この間は競技に専念。母校の大学院に戻り修士を取得。2015 年から金融証券会社に所属。
競技基本情報	競技:陸上競技 走り高跳び クラス分け:T64 主な戦績:パラリンピック 6 回出場 6 回入賞 競技開始年齢:19 歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・スポーツ推薦で合格した大学に入学する直前、交通事故により右下腿を切断。 ・スポーツ推薦の使命感から義足をつけてハンドボールをするつもりだったので、切断後、すぐに気持ちは切り替えられた。 ・脚の治療専念後、次の 3 か月は T 会で義足を作ってリハビリをした。 ・Y 県での主治医であった先生が、義肢装具士 U さんが作った冊子を持っており、その冊子に義足でできるスポーツがたくさん紹介されていた。そこで、両親が U さんに会いに行き、地元で義足を作らず直接 U さんに作ってもらった(大学での生活が迫っていたため)。 ・受傷後半年で T 障がい者スポーツセンターにほぼ毎日通いリハビリ。そこでパラリンピックのことなどの情報を得たが、この時はハンドボールに復帰するつもりでいた。障害者スポーツセンターのことは U さんから教えてもらった。Y 県にもリハビリ施設はあったが高齢者が多く運動量が少なかった。 ・スポーツ指導員の出身大学に連れられて、そこで初めて板バネを使って走った。そこでハンドボールの選手としては難しいなと思い、高跳びをやったところ、当時の日本記録(1m50)を超え、1m65 を跳んだ。そこで陸

	上部に入部しようと考えた。復学前に大学のハンドボール指導者も勧めてくれた。 ・大学では1年先輩に上肢障害のスキー選手がいたが陸上部にはいなかった。跳躍のコーチがみんなと同じように扱うという条件で入部を認めてくれた。 ・この大学にはトップ選手もいるが一般入試で入ってくる人もいて、そういう人と一緒に練習ができたのがよかった(自分は邪魔しているのではないかという心配をせずに済んだ)。 ・大学の授業ではサッカーだけはどうしても難しいので配慮してもらったが、それ以外は一緒にできた。大学に「特殊体育」の専門の先生もいたので良かった。 ・初めての試合は2000年4月。陸上部に入ってからすぐに九州パラ陸上に出場。 始めた場所:T 障がい者スポーツセンター 重要な他者:リハビリ期・開始期 ・スポーツ情報を持っていたY県の主治医。スポーツをする上では膝があるか無いかが重要。膝上切断とせず膝下切断にしたいという要望を聞き入れてくれた。 ・義肢装具士のUさん、走りのベースを作る上ではUさんが主宰する切断の陸上競技クラブ。 ・競技を始めてからはコーチのFさん ・リハビリ中は看護師(→のちの妻。切断に関する様々な情報をくれたおかげでスポーツをするまでの見通しも持てた。医療的なケアをよく知っていることから付き合うようになってからも安心だった)
障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件	・シドニーパラリンピック ・大学の受け入れ態勢
受傷前スポーツ	・ハンドボールで大学のスポーツ推薦を受けられるほどのレベル。

ツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	・スポーツ推薦で入学直前に受傷。被推薦者としての責任を果たすためにもすぐにスポーツに復帰することを考えた。
障害者スポーツ継続に関する状況	・北京パラリンピックで NHK が開会式を放送してくれたことがスポンサー集めなどに好影響。だが、野球やサッカーなどのプロとは全く違う。 ・パラの選手は共生社会等をテーマにした様々な講演会活動や執筆活動ができることが大きい(2008 年以降、講演は年間 30 回以上)。特に教育の部分で我々パラアスリートが活動させていただくということは大きい。 ・場所:大学でやっていた時は毎日練習したい時に大学施設が使えた。地元に戻ってきてからはそれが難しい。 ・指導者:競技を行う時期によって義肢装具士が重要な他者であった時期もあるし、その後は競技のコーチの重要性が高まってきた。競技コーチは 2004 年以降指導してもらっている。
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・経済的基盤となるスポンサー(所属企業)等の出現 ・北京パラリンピック、東京パラリンピック
今後のスポーツ実施	・今後も現役を続けるが指導者としての道も切り拓きたい。指導者としても勉強をしながら、選手とともに高めていきたい。 ・さらに、一般の人と同じ土俵でマスターズでの競技(義足側で踏み切らなければ出場できるという約束を取り付けている)を考えている。 ・現在所属している会社とは一線での現役引退後のことは詰め切れていない。現在仕事でやっている社員の健康管理に関する仕事をするとか、社内パラリンピックチームの指導者をするとか、一般社員と同じ仕事をするという可能性もある。
まとめ	・急性期・リハビリ期を担当する医師がパラスポーツの知識を持っていることは非常に大きい。予後にスポーツを実施することを想定した手術や治療ができるからだ。D さんの場合、そうした医師が主治医だったことが

	大きいと考えられる。 ・そしてその医療関係者が国内でも有数のスポーツを理解した義肢装具士につないでくれ、さらに障害者スポーツセンターでのリハビリに繋がっている。そのリハビリ中に陸上競技と出会っている。 ・スポーツ継続に関しては、生活する経済的基盤がしっかりしていることが重要である。D さんの場合、自らスポンサー探し・契約をするなど主体的な活動の成果がここに見られる。さらに練習環境が整っていたことでスポーツの継続が可能となっている。 ・パラスポーツ普及にはUさんが主宰しているクラブのような、障害を持ったあとも地元でスポーツができる受け皿が必要。施設や指導者がいても仲間がいなくなかなか続かないと考えている。
--	--

(藤田紀昭)

仮名 21-E さん

インタビュー実施日時 2021 年 10 月 1 日 14:00-16:00 場所 オンライン

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1991 年 性別:男性 障害発生年齢:15 歳 障害内容:ユーイング肉腫による右下肢切断
略歴	障害受傷後、高校の部活動で陸上競技を始め、大学卒業後、事務職を経て、2016 年から現在の所属へと転職し競技を継続している。
競技基本情報	競技:陸上競技 主な戦績:ロンドンパラリンピック 4×100m リレー入賞、リオパラリンピック 4×100m リレーメダリスト 競技開始年齢:16 歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・小学 4 年生からサッカーを始めて、障害受傷前まで部活動で続いていた。 ・中学 3 年生の時にユーイング肉腫(骨肉腫)で右下肢を切断し、6 か月ほど入院した。入院先の義肢装具士からモニターのような形で競技用義足を提供してもらった。当時は「サッカーをまたやりたい」という思いがあったが、リハビリの一環として高校入学とともに陸上部に入り、走ることを始め、上手く走れるようになると楽しさを感じ、競技を継続することにした。 ・高校入学後、体育の授業は「できるところを自分のペースでやってね」と、教員はできないところをしっかりとフォローしてくれた。部活動に関してはいわゆる強豪校ではなく、自分たちで楽しみながらやる環境であった。このような状況で自分のペースで楽しみながら陸上競技を始めることができた。また、17 歳の時に出場した地元の障害者スポーツ大会で同じ義足の陸上選手と出会い、パラリンピックの世界を知り、その後の目標となっていくた。 ・自分自身の障害に関連して、競技用の義足は形状が特殊で人目につきやすく、学校内で意識することはなかったが、学外の競技場での練習や大会時には人目を気にすることがあり、陸上自体はとても楽しかったが、始めた当初は義足が注目されることに抵抗感があった。
障害者スポーツ開始に影響	・自分の場合(義足を使用しての競技)は、障害のない選手と同じ条件で競うことができるので、一般的には「パラスポーツ」というジャンルに分類

を与えた社会的状況・環境・条件	されるかもしれないが、自分自身はパラスポーツに取り組んでいるという意識はあまりない。「陸上競技」に取り組んでいて、目指す大会の主だったものとしてパラリンピックがあると考えている。高校の陸上部では他の部員と同じように活動し、大学でも体育会系の陸上部に所属しており、仲間たちは「別に足があろうがなかろうが走ることにしては一緒だよ」と捉えてくれていた。本格的に陸上を始めてから、高校や大学で「パラだから特別に何かしないとね」ということが一切なく、周囲の人々が普通にありのままを受け入れてくれていたことが、楽しく陸上に取り組むことのできた要因であったと感じている。 ・自分と同じような障害のある人がスポーツを始めるにあたって、競技用義足があるに越したことはないが、とても高価で自分で用意をすることが難しい人が沢山いると思うので、スポーツを始める人を対象とした支援制度があると良いと思う。また、義足に関しては知識を持った医師や義肢装具士等に出会えるかどうか重要であり、足の切断についてもスポーツに適した・適していない方法があるので、適切な医療職と出会えるかどうか非常に重要であると考えている。
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	特になし
障害者スポーツ継続に関する状況	・2008 年頃からパラ陸上の大会に出場し始め、大学卒業後、事務職を経て 2016 年から現在の所属へ転職。所属先の支援を受けながら競技を継続している。 ・現在は、週 5 日ほど師事しているコーチが主宰しているクラブで、障害のない選手とともに練習・トレーニングを行っている。
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・競技を継続するにあたり、現在の所属先の存在がとても支えになっている。学生時代・前職では、競技に関わる支出は全額自己負担となっており、コーチをつけることができず、海外遠征についても絞り込んで参加するしかない状況であった。現在は競技に関する経費は所属先の負担となっており、コーチ・トレーナーをつけて遠征や大会にも帯同してもらい、練

	習環境は充実している。 ・また、障害のない練習仲間たちの存在が競技へのモチベーションになっている。自分の陸上競技人生の大半は障害のない選手と競うことがほとんどで、その選手たちにはどうしても勝てない状況であるが、足があるからという事とは関係なしに、隣で同時にスタートした選手たちには勝ちたいという思いを常に持っている。2016 年のリオパラリンピックでメダルを獲得したが、練習仲間には相変わらず勝つことができず、「別に自分はすごくないな」と痛感し、より勝ちたいという思いが強くなった。 ・現在の所属先に加えて、2014 年からお世話になっている義足メーカーの存在も重要なものとなっている。ただ競技用義足を作るということではなく、障害者や障害者スポーツに関わる問題を解決していきたいという思いを持っていて、そのような会社の理念に共感しており、これからも一緒に義足開発や様々な活動に関わっていきたいと思っている。 ・現在の競技環境について、日本陸上競技連盟(健常者)と日本パラ陸上競技連盟(障害者)という 2 つの競技団体があり、義足の選手たちは日本陸連主催の大会に出場することができるが、その大会がパラ陸連の公認でなければ公式記録として認められず、限られた公認大会で記録を出さなければいけないという難しさがある。 ・以前は完全に両連盟の大会が独立していたが、最近では日本陸連主催の大会にパラのレースが導入されるケースがあり、交流が徐々にではあるが進んできている。象徴的な例として、大学陸上部に入部する義足選手が少しずつ増えてきているが、他の部員たちが、「足がないけれど、やっていることは陸上だよね」「同じようにやっていけるよね」と考えるようになってきており、このような環境が大学だけでなく地域の陸上クラブ等にも広がっていくことで、もっとたくさんの人々が陸上を楽しめるようになると考えている。
今後のスポーツ実施	・昔から 100mを 10 秒台で走るということを目指している。このタイムはパラリンピックで勝負していくには必要なタイムであると同時に、一人の陸上選手として「足速いよね」と認められるタイムであると思う。また、「パラ陸上選手」ではなく「陸上選手」として認められたいという思いがあり、純粋に足が速くなりたいという気持ちを強く持っている。

まとめ	・障害受傷後、入院先の義肢装具士に競技用義足を作製してもらい、高校の陸上部に入部して競技を始めた。 ・競技用義足は高価であり、これからスポーツを始める人を対象とした支援制度が必要ではないだろうか。 ・高校、大学と陸上部で競技を継続し、仲間たちが自分を特別扱いせず接してくれたことが、楽しく陸上を続けてこられた一因であった。 ・パラリンピック出場や勝利をもちろん目指しているが、障害のない練習仲間に勝ちたい、純粋に足が速くなりたいという思いで競技を続けている。
------------	--

(河西正博)

仮名 21-F さん

インタビュー実施日時 2021 年 10 月 5 日 18:30-20:30 場所 オンライン

個人基本情報	居住：関西地区 生年月日：1979 年 性別：男性 障害発生年齢：先天性障害 障害内容：脊髄腫瘍による両下肢機能全廃
略歴	中学 1 年生から車いすバスケットボールを始め、現在も競技を継続している。また、5 年前から本格的にパラクライミングを始めて、現在は日本代表選手として活動している。
競技基本情報	競技：車いすバスケットボール・パラクライミング 主な戦績：天皇杯日本車いすバスケットボール選手権大会 入賞、パラクライミング世界選手権 メダリスト 競技開始年齢：13 歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯： ・小学校から普通学校に通っており、体育は全般的に見学が多かったが、プールに関しては、「とりあえず泳げ」ということで参加。マット運動に関しても自分なりにできるところは参加していた。当時は体育だけでなく、学校生活全般において特別支援や合理的配慮という発想がなかったので、良くも悪くも何かできないことがあれば自分の責任になり、その一方で何かにチャレンジするとすれば、他の生徒と同じように対応してもらえるような環境であった。 ・子どもの頃から英会話や習字、スイミングなど、様々な習い事をしており、それらの 1 つとして中学 1 年生の時に母親の勧めで車いすバスケットボールを始めた。当時は週に 1 回練習に参加しており、全くシュートが届かない、車いす操作が誰よりも遅い、周りは大人ばかりであったことから嫌々参加しているような状況だった。しかし、中学 3 年生の時の対外試合で初めてシュートが入った時に、初めて車いすバスケットボールが楽しいと思えた。 ・パラクライミングに関しては、現在の職場である福祉センターで、子どもたちを対象にした障害理解教育の一環として視覚障害のクライミング体験を実施した時に、講師として招聘した K 氏（視覚障害クラス日本代表選手）との出会いが始めたきっかけであった。「自分も体験しても良いか」と言ったところ気さくに応じてくれ、1 つでも上のポイントに登れたら一緒に喜んでくれて、クライミング選手というだけではなく、一人の人として

	K 氏のようになりたいと思った。 ・クライミングを始めた当初は競技として続ける考えはなかったが、日々のトレーニングで、車いすバスケットボールでは使わない筋肉を駆動できおり、クライミングの練習頻度が上がるにつれて車いすバスケットボールのパフォーマンスが向上している感覚があり、「二刀流でやっていこう」と考えるようになっていった。
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・障害のある子どもたちがスポーツを始めるにあたって、競技団体やチームの情報提供が重要である。最近は SNS やホームページ等で発信されるようになっているが、必要な場所に情報が届いていない印象を持っている。子どもたちであれば特別支援学校、特別支援学級、普通学校や病院等、身近な場所、生活圏に情報が周知されることが必要であると思う。 ・また、私自身のクライミング日本代表選手との出会いが典型であるが、「否定しない大人」に出会えるかどうか重要であると思う。「目が見えへんからクライミングなんかできひんよ」「足が不自由なら別な競技したらええやん」ではなく、「いいね、やってみよう」と言ってもらえる人との出会いが必要ではないだろうか。
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	・先天性障害のため該当なし
障害者スポーツ継続に関する状況	・現在、車いすバスケットボールは週に2～3日程度、パラクライミングは週3日程度練習をしている。仕事と競技を両立しており、パラクライミングに関しては日本代表の活動で海外遠征の機会があり、有志の寄付等はあるが勤務先や協会からの支援はなく、国際大会へのエントリーを増やしたいと考えているが苦慮する部分がある。
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・車いすバスケットボールを続けてこられた要因として、大きなものは2つある。1つ目は、高校生の時に10人ほどいたメンバーがほとんど辞めてしまい、自分を含めて3人ほどになってしまった状況でキャプテンを任されたことである。メンバーが揃わなければチームが解散してしまう状況の中で、高校の友達やバスケットボール部の知り合い、地域の学校の子ど

	もたちに声をかけて、チームに残った先輩たちとともにどうにか日々の活動をやりくりした経験が大きかった。当時は大変という思いしかなかったが、キャプテンという責任ある立場を任されていたなければ途中で辞めてしまっていたかもしれない。 ・もう1つは大学時代の同級生(現:選手兼ヘッドコーチ)との出会いである。当時は珍しかった健常者選手としてチームを引っ張っていきに来て、彼が加入をしてから障害のある選手が増加し、日本連盟に登録し公式試合に出場できるようになり、チームの基礎を作ってくれた。現在、自分がパラクライミングを掛け持ちできているのは、彼がチームを一生懸命支えてくれているおかげだと思っている。 ・パラクライミングの継続に関しては、競技を始めたきっかけを作ってくれたK氏の存在が大きい。2018年・2019年の世界選手権に出場した時に、K氏の3連覇・4連覇を目の当たりにし、感動したと同時に自分もさらに頑張らなければと感じた。クライミングは個人競技であるけれども、自分にはたくさんの応援してくれる人がいて、応援したいたくさんのクライマーがいるということがモチベーションになっている。また、海外の同じクラスのクライマーたちも、大会で知り合うとインスタグラムやダイレクトメッセージでやり取りするようになり、言葉や文化は違うけれども「友達」と感じられる存在であり、また彼らと世界の舞台で戦いたいという思いも、競技の継続要因になっている。
今後のスポーツ実施	・車いすバスケットボールに関しては、「日本選手権で何位になる」といった目標はなく、求められるうちは続けて、年を取ってからもシニアチームから声がかかれば参加したいと思っている。車いすバスケットボールは自分自身の「居場所」であり、たとえシュートが届かなくなったとしても、一緒にやろうよと言われた場所で楽しくバスケットボールを続けていきたい。 ・パラクライミングに関しては、2023年の世界選手権(スイス)で金メダルを取りたいと考えている。パラリンピックの追加種目になるために、競技人口を増やすべく国内外で普及に関わる活動をしていきたい。
まとめ	・中学生の時に車いすバスケットボールを始めて、当時は嫌々参加していたが、高校時代のキャプテンとしての経験や大学の同級生との出会いを

	経て、現在は自分自身の「居場所」として楽しんで取り組んでいる。 ・視覚障害クラスの日本代表選手との出会いでパラクライミングを始め、世界選手権で金メダルを獲得すべくトレーニングに励んでいる。 ・障害のある子どもたちがスポーツを始めるにあたって、特別支援学校や特別支援学級、病院等への情報提供が十分ではなく、上手くマッチングできていない印象を受ける。 ・車いすバスケットボールに関しては、年を取ってからも必要とされる場所で楽しく続けていきたい。 ・パラクライミングは自分自身の競技力向上だけでなく、普及活動にも力を入れていきたい。
--	---

(河西正博)

仮名 21-G さん

インタビュー実施日時 2021 年 10 月 6 日 16:00-18:00 場所 オンライン

個人基本情報	居住:関西地区 生年月日:1998 年 性別:女性 障害発生年齢:14歳 障害内容:右大腿切断2種3級 リハビリ期間:1 年
略歴	中学 3 年で受傷、1 年後義足を作り地元クラブで走り始めた。高校 2 年で陸上競技部に入部し、高校卒業後理学療法士になるための専門学校に入るが、実習と競技の両立が困難でやめた。その後、短大に入学し栄養士の資格を取得した。 2016 年リオパラリンピック、2021 年東京パラリンピック出場、その後走り幅跳び専門のコーチに師事。高校 3 年生の時から企業と契約し、プロとして活動して、21 年 4 月から S 社所属。
競技基本情報	競技:陸上競技 100m、走り幅跳び クラス分け:T63 主な戦績:リオパラリンピック走り幅跳び 入賞、東京パラリンピック 走り幅跳び入賞 競技開始年齢:15 歳(高校 1 年生)
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・犬の散歩中に事故でけが、壊死が始まり大腿から切断。当時、バスケットボールをやっていたのでそれが出来なくなる事が辛かった。周りの皆が色々全て手伝ってくれたが、自分が出来る事を奪われていくような気がして、少しずつ自分で出来る事は自分でやらせてもらうように言った。そこから自分にもできることがあるということに気づけたのが大きかった。皆が支えてくれていたのでメンタル面ではあまり落ち込みはなく、すぐに前を向いていた。 ・切断後半年くらいで同じ切断の陸上競技選手(O さん)が会いに来てくれた。何が出来るか色々質問したが「全部出来るよ」と答えてくれた。O さんを見てこんなにきれいに歩いたり走ったり出来るんだって思った。主治医の知人が義足専門の医師で私の事が載った新聞を渡してくれ、その先生が O さんに私の存在を伝えた事がきっかけ。周りの人も非常にポジティブだった。 ・義足を作ったのは事故の1年後。その間、体育の授業はケンケンで参加していた。私に合ったルールを体育の先生が作ってくれたりした。 ・「車いすバスケやろうと思っていて」と伝えたら、O さんが「もうそんなバ

	スकेなんてやらなくていい、陸上やって！」って言って。ユニフォームをプレゼントしてくれて。「もうこれあげるからやるしかない」みたいな感じで、色々言ってくれて、試合に出てみたらすごく楽しかったので、陸上やろうと思った。その後も連絡を取り、走り方のアドバイスなどを受けていた。 ・最初は 100m だけで、2016 リオの年から走り幅跳びを始めた。 始めた場所： ・最初は地元の義足の人の陸上競技クラブ(Y 走行会)。高校 2 年から高校の陸上競技部に入った。 重要な他者： ・リハビリ期・開始期 医師、O さん、両親、SEKAI NO OWARI(歌手)
障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件	・担当医師がスポーツのことを知っていたこと。 ・ロールモデルの導き。 ・地元で義足者の陸上クラブがあったこと、高校部活動での受け入れ。 ・リオパラリンピック
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	・事故前に最初にやったのは空手、そしてバスケットボール。スポーツをやっていたことが受傷後マイナスに働いたことはない。
障害者スポーツ継続に関する状況	継続状況 ・大学 1 年次に 2016 年リオパラリンピック出場。 ・その後走り幅跳び専門のコーチに師事。 ・高校 3 年生の時から企業と契約し、プロとして活動。 ・21 年 4 月から S 社所属。 ・練習期は午前中に練習、午後ウェイトトレーニングやプール。出社する日は週 1 回、午後 2 時半まで仕事、その後練習。 ・コロナ前だと、年間 10～20 試合くらい、海外遠征は年に 3 回くらい。多い時で 4 回。 スポンサーが付いていなければこんなに遠征できていない。

	主な実施場所：同じ所属の Y 氏の母校の大学 重要な他者：同じ義足の走り幅跳び競技者 Y 氏、ライバル T 氏の存在
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・スポンサーの存在 ・一緒に練習、コーチ役でもある Y 氏 ・利用できる陸上競技場
今後のスポーツ実施	・陸上は自分の体が「あ、もう無理」と思うまでやりたい。 ・東京大会が終わって悔しい気持ちがあるのでパリこそはと思っている。それが終われば、きっとロスこそはと考えていると思う。 ・陸上をもし引退したとしても、普通に働けるようにという事を面接の時に伺っているが、実際にどうするかは決めていない。今は絵本を描いたり、自分で作った雑貨をネットショップで販売している。
まとめ	・受傷後、非常にスムーズに競技に入る事が出来ている。その要因として、担当医師が障害者スポーツに関する知識を持っていた事、ロールモデルとなる同じ障害のある選手がタイミングよく会いに来てくれ、その後も様々なアドバイスをしてくれた事、地元で切断者のための陸上競技クラブがあった事、一般高校の部活動で受け入れてもらえたこと等があげられる。また、リハビリ中も周囲の人々の反応や接し方がポジティブだったことも影響しているのではないかとと思われる。 ・他の切断のアスリートと同じで障害の受け入れも非常にスムーズであったように推察される。 ・競技の継続に関してはスポンサーの存在、同じ所属会社の Y 選手の存在が非常に大きい。 ・現在 23 歳と若い。陸上競技はもちろんだが、切断ヴィーナスのファッションショーに出演したり、雑貨を作ったり、絵本を描いたりとマルチに活躍しているところが特徴的である。 ・東京パラリンピック招致決定後に競技を始めており、その意味で本人の努力に加えて、スポンサー獲得などに関してはタイミングの良さも影響していると思われる。

(藤田紀昭)

仮名 21-H さん

インタビュー実施日時 2021 年 10 月 11 日 10:00-12:00 場所 オンライン

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1990 年 性別:男性 障害発生年齢:21 歳 障害内容:右大腿切断 リハビリ期間:約 1 年
略歴	高校卒業後、契約社員として就職。21 歳で受傷、約 1 か月入院。退院後、実家の近くの T 市国立リハビリテーションセンターに 3 か月程度義足づくりで入院。そこにはサッカーをしていた頃の同級生の父が PT(理学療法士)であったり、後に同級生が PT になったりと知り合いがいた。 2017 年、現在の会社(O 社)に転職。入社当時は週 5 日勤務後夜や週末に練習。会社からスポンサー料をいただく。冬の競技(スノーボード)もやっており、2022 年 北京パラリンピックを目指している。スノーボードを競技として始めたのは 2017 年。2019 年に結婚。
競技基本情報	競技:陸上競技 100m、走り幅跳び クラス分け:T63 主な戦績:2021 年 東京パラリンピック 100m(T63) 予選敗退。男子走り幅跳び(T63) 入賞 競技開始年齢:24 歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・事故後入院先の PT(理学療法士)や義肢装具士にスポーツを勧められて、色々提案してくれた。そうしたサポートの力は大きかった。何もプッシュされていなかったら、もしかしたら、やっていなかったかもしれない。アンプティサッカー、車いすバスケットなど様々なスポーツを経験したのち陸上競技を始めた。 ・当時、特に本気で取り組んでいるものはなかったので、かえって障害を負ったからといって大きなショックもなかった。 ・走るきっかけになったのは、勧められたランニングクリニック(2015 年 8 月、N 大学のグラウンドで実施、3 日間のプログラム)に参加したこと。自分から情報を探してまで何かしようという事はなかった。 ・そのランニングクリニックの講師が H さんと Y さんだった。2 人のパフォーマンスを見てすごいなと思った。ここで Y さんの存在を知った事が競技を本格的にやる一番のきっかけだった。 ・Y さんから東京にクラブチームがある事を教えてもらい、そこに連絡を取り、競技を始め、板バネ(義足)を借りて本気でやろうと思うようになり、週

	に 2～3 回練習に通った。翌年(2016 年)4 月に初めて試合に出場。 始めた場所:切断者の陸上競技クラブ、都内陸上競技場で 重要な他者:開始期 国立リハビリテーションセンターPT(理学療法士)、義肢装具士、Y さん
障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件	・スポーツに関する情報があるリハビリテーションセンター ・義足のランニング講習会 ・ロールモデルとなる選手の存在 ・競技用の義足を貸してもらえたこと
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	・小、中、と高校 1 年までサッカーをやっていた。 ・サッカーをやめてから事故までの数年はたまに 8 人制の大会に出る程度 ・パラスポーツへの影響は特にない
障害者スポーツ継続に関する状況	継続状況: ・現在は競技中心の生活。月・水・金・土が午前中走る練習。月・火・水・金・土に午後、ウエイトトレーニング。火曜と木曜はプール。日曜はオフ。 ・コロナ前であれば年間 6～7 試合、スノーボードは 1 試合出場。 ・所属の会社の理解が大きい。練習環境のサポート、社員の応援など。 ・スポーツを継続するのに一番大変なのは金銭面。海外遠征、義足費用、国内合宿など。また自分に合った義足があるか無いか、買えるかどうかの部分も大きい。 主な実施場所:O 大学、地域のプール 重要な他者:Y さん、妻、所属会社
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・転職するに際しては東京パラリンピック開催が大きく影響している。各社が選手の雇用を考えていたので。

今後のスポーツ実施	・今後とも夏と冬の競技を続けていきたい。もっとレベルを上げたい。Yさんを越えたい。 ・引退後は子どもたちの指導・育成という事があるかもしれないが、それをするのにもまずは今の競技力をアップさせしっかりと結果を出す事が大切だと考えている。 ・今の会社は非常に理解があるので、スポーツを通した社会貢献を会社所属でやれるのではと今は考えている。
まとめ	・受傷後、リハビリテーション施設が国立リハビリテーションセンターだったこともあり、スポーツに関する情報が豊富にあり、スポーツ開始に繋がっている。 ・そうした環境で、義足のランニングクリニックの情報も得て、陸上競技を始めるきっかけとなった。 ・そのランニングクリニックで Y 氏に出会い、本格的に陸上競技を始めるに至った。 ・その際、競技用義足を借りることができたことも競技生活の入り口にあっては大きかった。 ・スポーツ競技の継続に関しては所属会社からの経済的な支援や競技に専念できる環境づくりに対する支援があることが大きい。 ・また、目標となる選手の存在や家族の支援があることも重要であることがわかった。

(藤田紀昭)

仮名 21-I さん

インタビュー実施日時 2021 年 10 月 15 日 13:00-18:00 場所 S 県障害者スポーツ協会

個人基本情報	居住:東海地区 生年月日:1966 年 性別:男性 障害発生年齢:30 歳 障害内容:視覚障害(光覚)網膜色素変性症 1 種 1 級
略歴	小学校の頃から運動好き。マラソン大会はいつも 1 位か 2 位。体力測定は常に 1 級。中学校は柔道部。顧問(担任)教師の強引な勧誘で柔道部に。3 年でキャプテン。東海大会まで出場した(ベスト 16)。(鉄下駄で登校、朝練、昼練、夜遅くまで本練習)柔道初段。高校ではペン習字クラブへ。スポーツはほとんどせず。 高校卒業後、印刷会社に就職。1996 年に会社を退職し、その後何度か仕事につく。1992 年に結婚。2006 年に施術診療所を始めた。 2014 年に仕事を辞めて競技に専念。2015 年から 2016 年まではスポンサーが付いた。
競技基本情報	競技:柔道・陸上競技・自転車競技・水泳 クラス分け:F11 主な戦績:柔道 2000 年シドニーパラリンピック入賞 2002 年世界選手権団体 メダリスト 競技開始年齢:31 歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・1997 年、視覚障害になってから障害者に対するアドバイスが欲しいと思い、市役所に行った時に県障害者スポーツ協会があるというのを聞いて、その足で障害者スポーツ協会に行った。柔道がやれる事は分かったが、どこでやれるかなどは分からなかったなので自分で探し、柔道をやっている公民館に行った。 ・人は同情はしてくれるが、その先は無い。障害を持っても、大変でもまず自分から動かないといけないこと気付かせてもらった。 ・公民館の事務局では障害を理由に何度も断られた。10 回目くらいに行った時、その教室の先生に声をかけてもらった。先生が中学時代の私の事を知っていて、責任を持つという事で入会することが出来た。 ・入会先では障害のない人と一緒だったが、普通に柔道が出来ることが分かり受け入れてもらった。壁が近くにあったりする時は教えてくれたり、柔道着を握ってから始めたりという点では配慮してくれた。

	・障害者の大会があることを知らなかったが、その先生に教えてもらい 98 年に大会に出場(メダリスト)。99 年アジア大会に出場(メダリスト)。オーストラリアの選手が開催枠で出場するため繰り上がり、シドニーパラリンピックに出場し入賞した。 ・あれほど嫌だった柔道だが、柔道が強かったので、視覚障害者でもいけるかなと思って始めた。視覚障害になってからの柔道はやらされる柔道ではないのでとても楽しかった。 始めた場所:町の柔道場(公民館)障害のない人と一緒 重要な他者:開始期 ①公民館で柔道を教えていた先生(声をかけてもらわなかったら、柔道をする事が出来なかった)。 ②自分の子ども達(目が見えなくなってしまったので、普通の父親のようにには子どもが育てられないなと思った。だから自分の生き方を見て育てて欲しいと思って、子ども達のために頑張った)
障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件	・障害者福祉に関する情報提供システム ・県障害者スポーツ協会 ・居住地にある柔道教室(公民館)
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	・受傷前に柔道をやっていたからこそ、障害を持ってから柔道をやる事が出来た。
障害者スポーツ継続に関する状況	継続状況: ・2002 年イタリア世界選手権で団体メダリスト、2004 年ブラジル世界選手権で個人入賞 ・2000 年シドニーパラリンピック出場後、ネットで検索するなどして、自転車、陸上競技などを始めた。自転車を始めるに際して競輪場を使わせてもらえなかったが、粘り強く交渉し、競輪選手と仲良くなるなどして使わ

	せてもらえるようになった。しかし、タンDEM自転車が 150 万円もすることから諦めた。 ・陸上競技は子どもが陸上をしており、子どもの学校で砲丸を投げさせてもらったら意外と飛んだので始めた。2001 年～2006 年全スボ投擲種目連覇。陸上競技場での練習も最初は使わせてもらえなかったが人との関係を作る中で最終的に利用出来るようになった。 ・スポーツクラブ入会の際同様の事があった。この時は入会后障害のないメンバーが受け入れてくれなかったが、3 か月程度で受け入れてくれるようになった。 ・この期間は職に就くことなく競技数種目に専念していた。妻が働き生活を支えていた。2014 年以降も競技に専念。 ・現在、投擲専門の指導者に指導してもらっている。 主な実施場所：競輪場、陸上競技場、スポーツクラブ、プール他 重要な他者：妻、子ども、使用するスポーツ施設のスタッフ（彼らと仲良くなることで使用できるようになる）
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・東京パラリンピック ・障害者年金等の社会制度
今後のスポーツ実施	・105 歳までにマスターズで記録を残すことが目標。仕事はやらない。今の世界で満足している。 ・60 歳になったら一般の大会にも出ようと思っている。投擲 5 種に出る。ハンマー投げはやっていないので、後 5 年間で練習する。 ・105 歳まで面倒を見てくれるスポンサーも探す。健常者の大会に、アイマスクをして出る。そうすると社会的に認知度がアップする。その時に大きい会社の社会貢献でスポンサーマークを入れたら、その会社も社会貢献していると思われるのでそのようなスポンサーを探す。
まとめ	・障害を持ってからのスポーツ開始には、自治体の情報提供制度や障害者スポーツ協会の存在が影響している。

	・しかし、何より本人のやりたい気持ち、自ら動く行動力が大きく影響している。受け入れてもらえないスポーツ施設、クラブのメンバーに対しても声を荒げることなくコミュニケーションをとり、最終的に受け入れてもらえるようになっている。 ・スポーツを始めるに際しては県の障害者スポーツ協会が窓口になって、「情報提供と同時に、“こういうのがあるよ”ではなくて、もし柔道をやりたいと言ったら、こういう教室で、あそこの教室の先生に言ってあるから 1 回見学に行ってみなというところまで言ってくれるとよいと思う」と言っているように情報提供に終わらずスポーツの場へのつながりが重要であることが明らかである。 ・「105 歳までスポンサーをつけて一般の大会に出る」という今後のスポーツ活動の見通しはこれまでにないもので、一つのモデルになる可能性を秘めている。 ・家族や身内の理解と協力が最も重要である。
--	---

(藤田紀昭)

仮名 21-Jさん

インタビュー実施日時 2021 年 10 月 15 日 13:00-16:00

場所 S 県障害者スポーツ協会

個人基本情報	居住:東海地区 生年月日:1959 年 性別:男性 障害発生年齢:52 歳 障害内容:下肢切断 1 種 1 級 リハビリ期間:(治療を含む)3 年、リハビリ後もおなかの血流を促す手術や腱板断裂の縫合手術など手術を繰り返す。2016 年末頃まで。
略歴	幼稚園の頃から野球をしていたが、小学 3 年生からは、スポーツ少年団で本格的に開始。中学校でも野球部に入り、S 県で優勝。高校でも野球をやり県準優勝。高校卒業後、自衛隊一般曹候補生になった。その後部隊に入隊。 2000 年には結婚し、27 歳で除隊。実家の仕事を継ぐが、その後別会社に。その間ずっと野球はやっていた。2016 年から現職。障害者枠で入社した。会社は障害者スポーツの練習や普及活動もやりやすい条件(仕事として認められている)で、大会遠征も出張扱いとなっている。
競技基本情報	競技:アーチェリー・フライングディスク 主な戦績:2014 年長崎全国大会、2015 年和歌山全国大会、2016 年岩手全国大会フライングディスクメダリスト、2017 年アーチェリー部門で愛媛全国大会 メダリスト、2018 年福井全国大会 アーチェリー部門 メダリスト 競技開始年齢:55 歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	・経緯: ・事故後、S 県で治療中自ら障害者スポーツをやりたい旨医師に告げたことから切断の部位など配慮してくれた。また、県障害者スポーツ協会職員が、障害者スポーツの情報を持ってきてくれた。 ・障害者スポーツ協会職員とは勤務していた会社とのつながり(大会時のお弁当の注文など)があり、知っていた。 ・2012 年、入院中に初めてパラリンピック(ロンドン大会)をテレビで見た。それまでは今後のことなど不安で考えることが出来なかったが、パラリンピックを見て、障害のある人の可能性を知った。義足で競技する事を考えたが、医師からそれは難しいと告げられ、車いすの競技に関心を持つようになった。

	・リハビリを行った病院でもスポーツに精通している先生が多かった。入院していた病院にはけがをしたスポーツ選手が多く、その選手たちを見て自分のモチベーションも高まった。 ・入院中から週末は地元に戻り、障害者スポーツ協会でアーチェリーなどをした。義足で何もしない人生よりはスポーツに挑戦する人生の方がよいと考えた。 ・その頃、子どもは小 6 と小 3。友人に「何でお父さんの足がないんだ」というようなことを聞かれて辛い思いをさせたこともあり、もう一度スポーツをやって格好いいところを見せたかった。 ・2014 年頃からフライングディスクとアーチェリーを始めた。アーチェリーはコンパウンドボウを使った。もともと自衛隊で射撃をしていたこともあり、アーチェリーに挑戦した。射撃も一度やったがライフルの値段など初期投資が非常に高いのでお金のかからないものにした。この頃、障害者スポーツ指導員(初級)の資格を取得した。 ・全国障害者スポーツ大会(2014 年長崎・2015 年和歌山)に出場。 ・その後、カヌーにも挑戦するも 2017 年 12 月に再度、事故にあう。 ・その後、アーチェリーを本格的に行うようになる。全スポ(全国障害者スポーツ大会)の全国記録を上回っているが、2019 年、2020 年、2021 年と台風、コロナで大会が行われていない。 ・障害者アーチェリー協会には今年登録し、大会参加のための記録を目指している。 ・入院当初は体重が増え、体力も精神的にもなえていた。そういう時に県障害者スポーツ協会の職員が来てくれた。スポーツをする事で体が鍛えられ、社会復帰できると考えている。通常の体力があれば普通の会社にも入れると考えるようになった。 ・ 始めた場所:S 県障がい者スポーツ協会(体育館等) 重要な他者: ① リハビリ期 自分の意見を聞いてくれた医師(紹介状などにもスポーツをやりたい旨を書いてくれた)。S 県でのリハビリには妻が付き合ってくれた(妻もスポーツをしている)。
--	---

	②開始期 県障害者スポーツ協会職員、フライングディスクの指導者
障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件	・ロンドンパラリンピック ・県障害者スポーツ協会およびそこに付設の体育館 ・S 県でのスポーツ教室講習会やアーチェリーの練習時は、新幹線に乗り、車椅子で妻と帰宅
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	・野球で培った地肩の強さや射撃の訓練等が現在のスポーツ活動にも好影響を与えている。
障害者スポーツ継続に関する状況	継続状況： ・現在、火、水、土、日は競技に専念できている。 ・初級スポーツ指導員とフライングディスク指導員の資格も同時期に取得 主な実施場所： アーチェリー：S 市総合運動場アーチェリー練習場、福祉会館 フライングディスク：S 市福祉エリアグラウンド 重要な他者：現在の職場の上司
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・東京パラリンピック開催により指導する場を多く持つことができている。
今後のスポーツ実施	・自分でアーチェリーやフライングディスクを続け、パラリンピックを目指すと同時に、競技を広く普及していきたい。 ・アーチェリーやボッチャ、フライングディスクも障害があってもなくても出来る。教室等を通じて障害のある人と無い人の壁がなくなっていけばいいと考えている。若い人たちには、そうした事を伝えていきたい。
まとめ	・事故で受傷後、手術等を何度も繰り返している。 ・そんな中で社会復帰していくために必要な条件としての体力向上のため

	にスポーツを始めた。しかしそこに至るまで、病院の医師や障害者スポーツ協会職員が障害者スポーツに必要な情報を多く提供していた。また、病院内で見たロンドンパラリンピックの様子も影響を与えていた。 ・現在、会社で障害者スポーツを実施し、普及活動をするのを業務として認められている為、競技を存分に行うことが出来ている。 ・今後は自己の競技力向上と共に、競技の普及、若い世代が障害の有無による壁を取り除けるような活動に従事したいと考えている。
--	---

(藤田紀昭)

仮名 21-K さん

インタビュー実施日時 場所 2021 年 10 月 25 日 14:00-16:00 場所 オンライン

個人基本情報	居住:関西地区 生年月日: 1961 年 性別:女性 障害発生年齢:先天性障害 障害内容:二分脊椎
略歴	高校卒業後、いくつか転職し、45 歳の時にバドミントンを始めた。東京 2020 パラリンピック競技大会でバドミントンが正式競技になることが決定した後、アスリート雇用となった。アスリート雇用の契約が終了した現在、仕事をしながら、地元の次世代アスリートの育成を行いつつ、バドミントンを継続している。
競技基本情報	競技:バドミントン クラス分け:WH2 主な戦績:2013 年世界選手権シングルス・ダブルス・混合ダブルス 銅メダル 競技開始年齢:45 歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・子どもの頃は、外で友達とキャッチボールをして遊んでいた。中学校に入ると、友達に誘われ、ソフトボール部に入った。部員と同じことは出来ないため、ピッチャーにボールを返球する練習、打つ練習を行うなどして部活に参加していた。小学 1 年生から 3 年生までは養護学校に通い、体育の時間は障害のある仲間と一緒に運動をしていた。しかし、小学 4 年生で普通学校に転校してからは、高校を卒業するまで、体育の時間はずっと見学だった。卒業後は何度か転職をした。運動をする機会はなかった。 ・45 歳の時に、同じ会社に勤めるパラバドミントンの日本代表選手から「バドミントンを体験してみませんか」と誘いを受け、生まれて初めて競技用車いすに乗り、体験した。初めてにもかかわらずバドミントンができたことに感動し、続けてみようと思った。 始めた場所:障害者スポーツセンター 重要な他者:会社の同僚(パラバドミントン日本代表選手)、地域のバドミントンコーチ
障害者スポーツ開始に影響を受けた社会	・バドミントンを始めるに際しては、目標となる日本代表選手がいたこと、指導してくれる地域のコーチがいたことが大きい。 ・自宅から通える場所に、障害者専用施設があったことも影響している。

的状況・環境・条件	
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	先天性障害のため該当なし
障害者スポーツ継続に関する状況	継続状況: ・バドミントンを始めた頃から、地元のコーチが熱心に指導してくれたことで、バドミントンが楽しく、上達も早かった。車いすでバドミントンを行う選手は少なく、競技を始めてから1年で国際大会に出場した。同じクラスの海外選手の存在、圧倒的な強さに刺激を受け、もっと強くなりたいと練習を重ね、強化合宿などで全日本コーチから指導を受けた。バドミントンがパラリンピック正式競技に決定した後(5～6年前)、アスリート雇用となった。昨年、アスリート雇用は終了したが、地元の次世代アスリートの育成を行いつつ、バドミントンを継続している。 主な実施場所:近隣の体育館、障害者スポーツセンター 重要な他者:地域のバドミントンコーチ、パラバドミントン全日本コーチ
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・地域で指導してくれるコーチがいたこと、第一線で活躍していたパラバドミントンの選手と一緒に練習できる環境があった。 ・バドミントンがパラリンピック正式競技に決定した後(5～6年前)、アスリート雇用となり、バドミントン中心の生活となった。
今後のスポーツ実施	・地元の次世代アスリートの育成を行いながら、練習を継続していく予定。 ・スポーツを始める際には、まずはやる気が必要。指導者も体験に来た人をやる気にさせることが重要。バドミントンは、体育館の予約が取れれば練習が出来る。また、一緒にバドミントンを行う仲間がいると継続に繋がる。
まとめ	・中学校でソフトボール部に所属したが、卒業後は44歳までスポーツをする機会に恵まれなかった。

	・バドミントンを始めるにあたって影響を与えたものとして、パラバドミントンの日本代表選手、地域のバドミントンコーチ、障害者スポーツセンターの存在がある。 ・国際大会での海外の同じクラスの選手との出会い、全日本コーチから指導を受けたこと、継続的な地域コーチのサポートが競技レベルの向上や意識に影響した。 ・バドミントンがパラリンピック正式競技に決定した後、アスリート雇用となったことで、練習時間が増え、金銭面等でサポートが受けられるようになった。 ・アスリート雇用の契約が終了した現在は、仕事をしながら、地元の次世代アスリートに対し、国際大会での経験や技術指導を行いつつ、バドミントンを継続している。
--	--

(兒玉 友)

仮名 21-L さん

インタビュー実施日時 2021 年 10 月 30 日 14:00-16:00 場所 N 駅周辺会議室

個人基本情報	居住：東海地区 生年月日：1976 年 性別：男性 障害発生年齢：17 歳 障害内容：視覚障害（レーベル病） リハビリ期間：2 か月
略歴	妻と子ども 3 人の 5 人暮らし。 高校 2 年時にレーベル遺伝性視神経症（レーベル病）を発症。高校卒業後、鍼灸師の免許を取得するため、東海地区の特別支援学校（盲学校）専攻科理療科に入学し、専門教育を学ぶ。免許取得後、関東地区の国立大学理療科教員養成施設に入学して、理療（按摩・マッサージ・指圧・はり・きゅう）を教育する教員免許を取得する。取得後は関東地区の治療院に 4 年間勤務し、その後、東海地区の特別支援学校（盲学校）に教員として採用され、現在に至る。
競技基本情報	競技：視覚障害者柔道 競技開始年齢：16 歳（発症前から継続） 主な戦績： 2004 年 アテネパラリンピック 60 kg 以下級 メダリスト 2008 年 北京パラリンピック 60 kg 以下級 入賞 2012 年 ロンドンパラリンピック 66 kg 以下級 入賞 2016 年 リオパラリンピック 60 kg 以下級 メダリスト 競技：柔術（ロンドン大会終了後、柔道に活かす技術習得のために取り組み始める） 競技開始年齢：35 歳 競技：グラップリング 競技開始年齢：39 歳 視覚障害者柔道を引退したリオ大会後から取り組む。視覚障害者柔道の後進の指導のために役に立つと思い、道場に通い始める。
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯： ・高校入学後に始めた柔道が楽しく、強くなりたいという思いが徐々に強くなっていた。その矢先、高校 2 年時にレーベル病を発症。視力が 0.01 まで落ち、これまで出来ていた事が出来なくなることが増えた。周囲も視覚障害者の自分をどう扱っていいかわからない状況であった。自分を取巻

	く環境が変化していく中でも、視覚障害者柔道は組めば、これまでと同様に柔道ができた。周囲が視覚障害であることを忘れるくらい普通に接してくれたため、今の自分が認められていると自己肯定できた。発症前と変わらずに取り組める柔道が支えとなり、自分自身の心の拠り所になった。 始めた場所：高校の柔道場 重要な他者：高校の柔道部の恩師。柔道家としても教員としても尊敬している。柔道が楽しいということを教えてくれた。
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・発症前から柔道の楽しさを教えてもらっていた。 ・発症後でも一緒に練習に取り組む柔道部の仲間がいた。
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	・小学校はバスケットボールやソフトボール、中学校はバレーボール。 ・球技や団体競技が自分に向いていないと思い、個人競技で球技以外の部活動をやりたいと、高校で柔道部に入部。 ・柔道を好きになったこと、強くなりたいと思ったことが、発症後にも柔道をやりたいと思わせてくれた。
障害者スポーツ継続に関する状況	継続状況： ・視覚障害者柔道人口が少ないため、予選会なしで全日本視覚障害者柔道大会に出場できた。学生の部で優勝して周囲の人たちも祝福してくれたが、発症前の自分と実力が変わっていない中での周囲の評価に違和感があった。周囲とのギャップに居心地の悪さを感じていたが、視覚障害者柔道のパラリンピックの金メダリストの助言で、悩みが解消して、パラリンピックの金メダル獲得を目標に練習に注力。 主な実施場所：日常練習する道場、知り合いのいる道場での出稽古 重要な他者： ・助言をくれた U 先生（視覚障害者柔道のパラリンピック金メダリスト） ・妻や子どもたち（日中は特別支援学校の教員の業務があり終業後や週

	末を練習や大会に充てるため、妻や家族のサポートで継続できた) ・視覚障害を持つ職場の同僚の先生や生徒(国際大会などで授業ができないことを後ろめたく思っていたこともあったが、国際大会やパラリンピックで活躍している姿を見ることが励みになるからと後押しされた)
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・平日は遠方の道場への出稽古が難しかったため、これまで視覚障害者を受け入れたことのなかった職場近くの道場に依頼し、平日終業後の練習環境を提供してもらった。
今後のスポーツ実施	・視覚障害者柔道はリオ大会で銀メダルを獲得して引退。 ・現在は、後進の指導に役立つと思い、柔術とグラップリングの道場に通っている。
まとめ	・発症前から柔道の楽しさを知っていたため、発症後でも楽しく取り組むことができた。 ・視覚障害者柔道は組めば障害の有無にかかわらず取り組める競技のため、発症後、出来ないことが増えていく環境下において、心の拠り所となり、自己肯定に繋がった。 ・視覚障害者柔道を始めた当初は、自分の実力が変わっていないのに、周囲の評価が一変したことに戸惑いを覚えたが、同じ視覚障害者柔道のパラリンピアン助言で、パラリンピックの金メダルを目指すことを決意した。 ・柔道を通して、社会人としての自分、障害者である自分、柔道家である自分など、自分自身を多面的に捉えることができて、自己実現に繋がっていった。 ・障害受容はできていないが、柔道を通して、障害は不便だけど不幸ではないと思えるようになった。

(小淵和也)

仮名 21-M さん

インタビュー実施日時 2021 年 10 月 26 日 18:00-20:00 場所 オンライン

個人基本情報	居住：関西地区 生年月日：1981 年 性別：男性 障害発生年齢：26 歳 障害内容：右足腓骨神経麻痺 2 種 6 級 リハビリ期間：4 か月
略歴	一般小中高校・大学を卒業。一般高校数学教諭だったが、2 年前からは特別支援学校教諭として勤務。2018 年に結婚し、現在は妻と子どもと 3 人で暮らしている。
競技基本情報	競技：スノーボード クラス分け：LL2 主な戦績：2019 年世界選手権 メダリスト、2020 年ワールドカップ (NOR)メダリスト 競技開始年齢：23 歳（障害発生前から同一競技を実施。怪我をしてから 6 か月後に練習を再開）
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯： ・夏場スノーボードの練習場でジャンプの時にコースアウトし、両大腿骨を骨折。ゴールデンウィーク中の為、手術等がすぐに対応出来なかった事が影響し右足に障害が残った。 ・4 か月程度リハビリを実施。入院中からブーツが履けるかどうか等チェックをしていた。 ・医師にスノーボードが出来るかどうか聞いた所、問題ないということですのですぐに始められた。 ・怪我をしても気持ちが落ち込むということではなかった。動くようになるというのなら何かするが、治らないということなので、それを受け入れて普通に過ごしている。 ・技術的には重心の位置など様々な工夫をしている。怪我する前よりも考えて滑るようになった。 ・スノーボード自体を始めたのは最初の赴任地が田舎でやることもなく、車でうろろしているところゲレンデを見つけたのがきっかけ。 ・怪我をした後、スノーボードを再開して、リフトに乗っている時、スマホで検索して障害者の大会があることを知った。 始めた場所：(怪我をした後) :A スキー場(H 県)

障害者スポーツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件	・それまでのスノーボード競技の経験があったこと。 ・障害者のスノーボード大会があったこと、また、その情報をネットで得ることができた(ネット社会が出来上がっていた)こと。
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	・小・中学校ではサッカー、高校では弓道をしていた。 ・23歳でスノーボードを始めて2年でインストラクターの資格を取得した。大会にはそれほど多く出ていなかった。大会では西日本で中の下くらいだった。
障害者スポーツ継続に関する状況	・2010 年頃、初めて障害者の大会に出場した。この時は選手をサポートする人たちの部に出た(全国障がい者スノーボード選手権大会&サポーターズカップ)。 ・この大会の次に出た時から障害者の部に出場するようになった。 ・2016 年 11 月に初めて海外の大会に出場した。海外の大会では最初は成績を残せなかったが、コーチやトレーナーに言われたようにトレーニングをするようになって結果が出るようになった。2019 年には世界選手権で 3 位になった。 ・日本代表チームに入っているが、その中でも勝ていかないとパラリンピックには出られない。2021 年 12 月まで争って残り 1 枠を取りたい。 ・教師をしている為、基本仕事を中心となる。冬場は仕事終わりに近くのゲレンデに行ってナイターで練習をする。夏場は週末などに芝の練習場や人工雪の練習場に行って練習をする。 ・今年はヘルニアのため夏場はジムで筋力トレーニングが中心だった。 ・仕事が公立学校教員という事もあり、他の選手のように海外遠征にたくさん出て行く事はできない。基本的には有休を使って行く。事前に計画を立て、多くの先生方に配慮していただいている。管理職も理解があり、助かっている。 ・年間普通だと 10 日から 2 週間くらいの海外遠征が 2 回から 3 回ある。コロナの影響で、帰国後隔離となるが、そこは特別休暇等の扱いとなっている。

	・国内の合宿も同じくらいの日数を使うが、自分は週末だけの参加となる。 ・1回の海外遠征で2大会くらいに出場しポイントを取ってくる。 ・最近ではアスリート助成金もあり、経済的に助かっている。 ・引退した後のことも考えると、現職を辞めることはあまり考えられない。
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・公務員でこうした活動が出来るのは、職場の理解が一番大きい。 ・外に出ることが多いので家族の理解も必要。妻が理解してくれている事も大きい。 ・冬季スポーツはお金もかかる。スポンサー企業が道具を支給、支援してくれている事も大きいですが、雪質等に合わせて様々な会社のボードを使いたいという事もあり、難しい所である。 ・精神的な部分ではスノーボードをやり始めてからずっと憧れの存在だったO氏の存在は大きい。同じ日本代表チームでやっていることは大きな支えであり、刺激となっている。
今後のスポーツ実施	・腰のヘルニアのこともあり、北京パラリンピックを区切りにしたいとは思っているが、今悩んでいる。 ・自分の思った通りの結果が出ればいいが、多分難しいので、そうなるとその次もという考えもある。 ・スノーボードは死ぬまでやと思う。 ・指導者については求められればやと思うが、多分求められない。
まとめ	・障害を持つ前からスノーボードをやっており、受傷がスノーボード継続に大きな障害とならなかった事が同一競技を継続できた要因といえる。 ・障害を持つ事でそれまでの生活や競技生活が分断されるという事が無いこれまではなかったキャリアパターンといえる。 ・公務員をしながら冬季競技をトップクラスで継続するのは相当大変な事だと考えられるが、職場の理解と支援が大きく、そのことを可能にしている。ある意味二刀流を成功させている。 ・日本代表チームの人間関係が非常によく、お互いを刺激しあって伸びていっているという雰囲気をお話から、感じ取る事ができた。この事が競技継続の大きな要因となっている。 ・2020 パラリンピック東京大会決定後、アスリート助成等の制度ができ、

	経済的な支援も受けられるようになった事も継続の要因といえる。
--	--------------------------------

(藤田紀昭)

仮名 21-N さん

インタビュー実施日時 2021 年 11 月 1 日 19:00-20:30 場所 オンライン

個人基本情報	居住：東海地区 生年月日：1981 年 性別：男性 障害発生年齢：32 歳 障害内容：右大腿 2 分の 1 以上欠損(3 級) 入院・リハビリ期間：2 か月
略歴	事故前はサラリーマンだった。2015 年に結婚し、妻と子ども 5 人の 7 人家族。現在も同社に勤務。2019 年からアスリート雇用。
競技基本情報	競技：スノーボード クラス分け：LL1 クラス 主な戦績：2016 年全国障がい者スノーボード&サポーターズカップメダリスト、2017 年ワールドカップスノーボードクロス メダリスト、2017 年ワールドカップバンクドスラローム メダリスト、2018 年平昌パラリンピック男子バンクドスラローム 入賞、2019 年スノーボードクロス 入賞。 競技開始年齢：20 歳(障害発生前から同一競技を実施)
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯： ・業務中の事故により右大腿 2 分の1以上欠損となった。事故で大腿部から切断となり病院搬送後に手術を受けるが、1 か月後に患部が壊死し、断端部の傷口が開いてきたため再手術を受けた。術後 2～3 日経過した時からリハビリを開始、再手術から 3 週間後に義足での歩行・リハビリを行い、入院から 2 か月後に退院。退院後 1 か月間が自宅療養期間で、1 人旅に出かけ、1 日 30～40 キロのサイクリングに挑戦するなど、アクティブな療養期間を過ごした。切断をした事実は客観的に捉えており、落ち込んだことはない。入院中も見舞いの友人、義足を履くこと、リハビリも筋トレの延長というイメージでとにかく楽しく取り組んだ。腹筋、片足スクワット、片足自転車漕ぎなど入院中にあまり筋力が落ちないようにと思ってトレーニングしていた。 ・義足を作った後に再手術をしたので、ソケットが合わず作り直すことになった。事故で足が取れているのを見て、自分は義足になると思い、何ができるかと考え「スノーボード」だと思った。入院中に調べていたら、ソチパラリンピックからスノーボードが種目として採用されることを知り、パラリンピックに出ようと思った。もともとプロスノーボーダーだし、義足の友達 H がいたことも大きい。彼は片足でスキーをし、生活をしているのを見て

	いたので、義足や切断に対する不安はなかった。 ・最初に入院した時の義肢装具士が、「義足でカッコよく歩け」「なんでもスポーツはやってみろ」という人だった。まず使用したのが歩行用の義足で、日常生活用で初心者向けのソケットが深く可動域の少ない感じのもので、スポーツには向かなかった。最初にスノーボードをやった時にこのソケットじゃダメ、もう少し曲がりやすい義足じゃないと滑れないと感じた。もともと情報もなく知識もなかったのも、日常生活やサイクリングでは不便を感じなかったが、スノーボードをし始めて感じるようになった。 ・義足になった時は、ネットで調べても情報が出て来なかった。「義足」と調べても下腿義足しか出て来ない。大腿義足の情報はすごく少なく、さらにスポーツ、大腿義足でスポーツするという情報が本当に少なかった。それぞれの競技ごとに必要な情報があったら一番いいが、日常用のことでも、情報がすごく大事だと思った。そんな状況で頼ったのは、義肢装具士、そして自分と同じ大腿義足のスキーマーH。 ・義足を履いて、スノーボードの大会に出場したのは2016年の第2回全国障がい者スノーボード&サポーターズカップで、大腿切断の部でメダリスト。 始めた場所：元々のホームゲレンデはOスキー場 重要な他者：大腿義足の友人スキーマーH、義肢装具士、勤務先の会社の社長
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・ソチパラリンピックでスノーボードが正式種目に採用されることが決まり、パラリンピックに出場しようと思った。 ・スノーボードを継続することに対する会社の理解、さらに強化指定選手になることで得られる各種補助金の存在。
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	・子どもの頃から家族でよくスキー場に出かけていた。小5からスノーボードを始め、大学2年で本格的に競技をやりたいと思い、ニュージーランドのキャンプに参加した時にHと出会ったこと。 ・受傷前にプロスノーボーダーであったことが、競技に向かう姿勢を形成している。

障害者スポーツ継続に関する状況	継続状況： ・今は週 1 回室内のハーフパイプ(3 時間)、週 3～4 回人工芝のジャンプ練習場(30～40 分)、週 2 回ジム、これからは雪の上や遠征が増える。良き理解者は、家族(特に妻)と会社の社長である。 主な実施場所：室内のハーフパイプ(3 時間)、人工芝のジャンプ練習(30～40 分) 重要な他者：妻、社長、代表チーム(コーチ、チームメイト)
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・連盟の指定強化選手で、アスリート助成ももらっている。会社の理解もあり、アスリート雇用として競技に専念できる体制もある。
今後のスポーツ実施	・当分引退は考えていない。 ・元プロスノーボーダーなので、ライセンスの再取得を目指している。
まとめ	・事故で切断後すぐに義足で何が出来るかを考え、もともと行っていたスノーボードなら出来ると思った。当時パラリンピックの正式種目に採用されたことで、パラリンピックに出るという目標が出来た。 ・友人に同じ大腿義足のスキー選手がいたことで、義足で生活すること、スポーツをすることに対する不安を感じなかった。 ・大腿義足でスポーツをすることへの情報が少ない中、自ら必要な用具や支援を見つけていった。 ・東京パラリンピック開催決定後の各種助成制度がスポーツ継続には好影響である。 ・スポーツ開始、継続とも妻、社長の理解と支援が大きい。

(齊藤まゆみ)

仮名 21-O さん

インタビュー実施日時 場所 2021 年 10 月 29 日 15:00-17:30 場所 オンライン

個人基本情報	居住:関東地区 生年月日:1980 年 性別:男性 障害発生年齢:16 歳 障害内容:右上腕欠損 リハビリ期間:4 か月
略歴	妻と子どもの 3 人暮らし 都内企業に契約社員として所属し、主にアスリート活動を行っている。 小学校、中学校、高校とバレーボール部に所属。高校では全国大会にも出場した。17 歳でバイク事故を起こし、右上腕の 1/2 以上を切断。入院・リハビリでの 2 年間の休学を経て高校を卒業。21 歳の頃にスノーボードを始めるが、国内でのパラスノーボードが競技として存在しておらず、28 歳で一度引退。その後、国内にパラスノーボード競技があることを知り、38 歳で再挑戦。現在は、スノーボードクロスの日本代表強化指定選手として活動続ける。
競技基本情報	競技:パラスノーボード クラス分け:UL 主な戦績:全国障がい者スノーボード選手権 3 連覇(スノーボードクロス)、北米選手権 メダリスト(スノーボードクロス) ワールドカップ オーストリア大会 バンクドスラローム メダリスト 競技開始年齢:21 歳(スノーボード)、38 歳(スノーボードクロス)
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯: ・高校 2 年時にバイク事故により右上腕を失った。入院時に義手をつけるためにリハビリを行ったが、実際にできた義手は長すぎて制御が難しく、現在は義手を付けずに日常生活は送っている。受傷当時はショックで「人生終わったと感じて、何度か自らで命を絶とうと行為に及んだが、死にきれなかった」。徐々に生かされていることに意味があると感じ始めた頃にスノーボードに出会った。高校在学中にアルバイトしていた勤務先の社長と社長の弟に誘われてスキー場を訪れた。当初は片手でブーツの紐も結べない自分を他人に見られることが嫌で躊躇していたが、滑り始めると、周囲の人たちが喜んでくれて、スノーボードをやっている時は、他人の目が気にならなくなった。「一度は投げ捨てた人生。どうせなら本気でやってみよう」と、スノーボードに熱中していった。

	始めた場所：スキー場 重要な他者： ・勤務先の社長と弟。特に弟は同世代で、お互いに上達しようと励まし合いながらスノーボードを続けた。 ・ジャンプ台をきれいに飛んでいた名前を知らない選手。自分がやりたいのはこのジャンプだと気付かされた瞬間で、そこから本気で練習するようになった。
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・2000 年以降、これまでスノーレジャーの主流であったスキー、スケートの市場規模とスノーボードの市場規模が同等になってきた。スノーボード利用者は増え、これまでスノーボードの滑走を禁止していたスキー場でも、徐々に滑走可能となり、多くの若者がスノーボードをするために、スキー場を訪れるようになった。
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	・小学 5 年生からバレーボールに打ち込む。中学校、高校と続け、高校 2 年時には全国大会に出場する。 ・父親がK県の白バイ指導員(副業)をやっており、3 歳からオートバイに親しむ。高校 2 年時には東京都のオートバイ大会で入賞し、特別訓練所の訓練生に選出される。 ・受傷後、利き腕変更し、左腕で打つ練習をして、社会人バレーボールチームでも活動が続ける。 ・バレーボールをやっていたため、体格に恵まれ、海外選手に引けを取らず、ストローク量で優位に立てる。 ・バレーボールでは走る時や跳ぶ時に、母趾球を使って体重を乗せてプレーをすることが多く、スノーボードでの腰の動きや体重移動、反応の良さなどに好影響を及ぼしている。
障害者スポーツ継続に関する状況	継続状況： ・日本の雪は柔らかく、コースを作っても溶けてしまうことから、スノーボードクロスは常設コースは存在しない。そのため、国内で練習するにあたっては、大会用に臨時で設置されるコースの情報を集めて、大会開催の前後の期間で練習する形式で国内のコースを転々する。一方で、海外では常設コースがあるため、スキー場で利用料を支払えば練習が可能である。

	・主な実施場所：スノーボードクロスのコース（国内は大会用の臨時コース、海外は常設コース） 重要な他者： ・同年代の義足の日本代表チームメイト、心技体が揃っており、世界ランキング1位に上り詰めるまでの過程も見ている。憧れの存在。 ・海外の有名選手（ピーター・ライン）。当時は、スピントリックが従来の回し方と異なり衝撃であった。自分の中にあったスノーボードの価値観が変わり、一気に世界が広がった。
スポーツ継続に与えた社会的状況・環境・条件	・パラスノーボードが2014年ソチ大会ではデモ種目、2018年平昌大会では正式種目として採用された。日本障害者スキー連盟がスノーボードも含めた障害者のスノースポーツを統括するようになった。
今後のスポーツ実施	・2022年の北京大会、2026年のイタリアのミラノ／コルティナ・ダンペッツォまではスノーボードで、それ以降は障害者ゴルフをしていくことで所属先企業と話をしている。 ・スノーボードを引退していた時期に、妻と共通の趣味であるゴルフを始めた。やってみると非常に難しく、現在も興味を持っている。
まとめ	・事故で右腕を失い、人生に絶望していた時にスノーボードに出会った。仲間と一緒に成長していくこと、人との出会いに感謝できるようになり、人生を前向きに捉えられた。右腕がない自分を受け入れられるようになり、他人の目が気にならなくなった。 ・スノーボードを始めるきっかけも、継続するきっかけも、自分が目にしたジャンプが格好良くて感動し、それを自分でやってみたいという想いで無我夢中で練習して、できるようになった。 ・国内では、パラスノーボードが競技として認められず一度は競技から引退するが、10年後に競技として認められたことで、現役復帰する。 ・バイク事故が起きる受傷前が第一の人生、受傷後が第二の人生、スノーボードと出会ったのが第三の人生。自信がゼロになっていた第二の人生だが、第三の人生を継続することで、右腕の無い自分に少しずつ自信が持てるようになった。

	・2019 年より所属先企業がアスリート活動を全面的に支援してくれることで、国内に存在しない常設コースを海外遠征で回ることが可能となった。
--	---

(小淵和也)

仮名 21-P さん

インタビュー実施日時 2021 年 11 月 4 日 14:30-16:00 場所 オンライン

個人基本情報	居住：関西地区 生年月日：1985 年 性別：女性 障害発生年齢：先天性障害 障害内容：視覚障害（先天性弱視）
略歴	2 歳頃から地元のスイミングスクールで水泳を始め、中学校、高校時代は水泳部に所属し、大学入学後に障害者水泳のクラブでパラ水泳に出会い、現在もそのクラブを活動拠点として競技を継続している。
競技基本情報	競技：水泳 クラス分け：S13 主な戦績：2008 年北京パラリンピック入賞、2016 年リオパラリンピック出場 競技開始年齢：19 歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯： ・体育に関して、小学校時代は周りの子どもたちとの運動能力の差がそれほどなく、球技の時に少し不自由さを感じる程度で同じように取り組むことができたが、中学校、高校と種目が専門的になるにつれて苦勞するようになっていった。特にバレーボールやバドミントンに関しては、ボールやシャトルが床に落ちてから自分がレシーブすべきだったと気づくような状態であったが、当時は障害の自己覚知ができておらず、「運動神経が悪いからできないのかな」と感じていた。 ・水泳に関しては、近所の幼馴染みたちがスイミングスクールに通い始める中、親の勧めで自分も始めた。週に 2 回程度通っており、始めた当初は近所の友達と一緒に通う事が楽しかったが、級が上がるにつれて練習強度が上がり「習わされている」ような感じで、「泳ぐことは好きだけどスイミングの練習は嫌い」という思いを持っていた。 ・その後、中学校、高校と部活動で水泳を続けて、大学入学後は競技から離れて、指導に携わりたいと思い、地元のスポーツ施設で知的障害のある子どもたちのスポーツボランティアをしていた。そこで、大学 1 年生の秋頃に、視覚障害のある子どもの保護者から、「視覚障害の水泳でパラリンピックを目指したら」と言われ、視覚障害の水泳は全盲クラスしかないと思っていたが、調べたところ弱視のクラスがあること、また、地元には障害者水泳のクラブがあることを知り、自ら問い合わせ入会したことがパラ水泳との出会いであった。

障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・自分の親が障害と向き合って、自分の子どもの障害はどのようなものなのかについて、もう少し調べてほしかったと感じている。また、半年に1回程度、検査で病院に通っていたが、自分が障害者手帳を取得できる事を教えてもらえなかった。高校3年生の2学期に大学受験に向けて志望校に試験配慮の相談をしたところ、障害者手帳が必要だと言われて、病院に相談し初めて自分が手帳を取得できることを知った。通っていた病院の医師や視能訓練士がもう少し早く対応をしてくれていたら良かったと感じている。 ・また、中学校水泳部の顧問とBクラブで再会した時に、「当時からPさんの障害をちゃんと理解していれば、弱視の知識があればもっと早くパラ水泳に取り組めたのに」と言われたことを覚えている。学校関係者、医療関係者、周囲の人々が(弱視のような)見た目ではわからない障害に対して理解をしてくれることで、スポーツに取り組みやすい環境ができていくと思う。 ・パラ水泳を始めるにあたって、Bクラブのチームメイトとコーチの存在が大きかった。高校までは「すべて健常者と同じようにしなければならない」と考えていたが、いろいろな障害のある選手たちと関わる中で、自分の障害に合わせて練習をすればよいと考えられるようになった。また、コーチからは「フォームが汚い」と指摘されて、なぜ水中姿勢が悪いのか、それを直すための方法や障害があるが故にできないこと等が理解できるようになり、Bクラブに入ったことで自分の可能性が大きく広がったと感じた。
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	・先天性障害のため該当なし
障害者スポーツ継続に関する状況	継続状況: ・パラ水泳を始めてからしばらくはBクラブのみで週3日程度練習をしていたが、北京パラリンピック出場決定後から、練習量を増やすためにBクラブと並行して民間のスイミングスクールの選手コースで練習をするよう

	になった。現在も同様の環境で週 4 日から 5 日程度練習をしている。 ・大学卒業後、現在の所属先に就職し、当初はフルタイムで働いていたが、会社との話し合いで時短勤務が認められるようになり、現在は午前中の半日勤務で、午後は水泳に関する活動に充てられるようになっている。また、競技に関する経費については、給与とは別にすべて会社の負担となっている。
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・パラ水泳を始めた時と同様に、競技を続けるにあたっても B クラブの存在がとても大きなものとなっている。B クラブは全国的に見てもとても大きな障害者チームで、専門のコーチの指導が受けられ、定期的に練習できる環境が整っているため、このクラブがあるから引退せずに水泳を続けられていると思っている。 ・民間のスイミングスクールにも通っているが、そこは大勢に同じメニューを課して、個々への技術的な細かい指導はあまりないと感じている。一方で、B クラブのコーチたちは、個々の障害に合わせて一人一人の能力をどのようにすれば引き出せるかということを考えて指導してくれるので、そこは自分にとって大事な部分である。 ・自分と同じような視覚障害のある人たちが水泳を続けていくためには、B クラブのような環境が必要ではないだろうか。障害の度合いにもよるが全盲のクラスであれば特に、タッパー（ゴールやターンの時に壁が近づいていることを選手に知らせるために、バーで叩いて教える役割）やサポートスタッフならびに、障害に理解のある指導者が必要であると思う。もちろん民間のスイミングスクールで活動できれば良いが、現状としてサポート体制が十分であるとは言えないので、障害者クラブとスイミングスクールのどちらでも活動できることが理想であると考えている。
今後のスポーツ実施	・以前は「パラリンピックを目指さなければいけない」と思っていたが、最近では自己ベストを出したいという意識が強くなってきている。中学校・高校時代の純粋に水泳が楽しかった当時を思い出して、タイムにこだわっていきたいと考えている。「パラ水泳」というよりも「水泳」そのものが好きなので、一度原点に立ち返って楽しんでいきたい。 ・また、指導者に以前から興味を持っており、競技と並行してまずはお手伝いのような形で関わっていけたらよいと考えている。

まとめ	・2 歳から水泳を始めて、中学校、高校と部活動で水泳を続けた。 ・大学入学後、B クラブと出会い、チームメイトやコーチとの関わりの中で、自分の障害に合わせて取り組めばよいと考えるようになった。 ・自分と同じような障害のある人々がスポーツを始めるにあたっては、弱視のような見えづらい障害に対する、学校関係者、医療関係者や周囲の人々の理解が重要であると思う。 ・今後は自己ベストを更新することを目標として、「パラ水泳」というよりも「水泳」そのものを楽しんでいきたいと考えている。
-----	---

(河西正博)

仮名 21-Q さん

インタビュー実施日時 2021 年 11 月 19 日 13:00-15:00 場所 オンライン

個人基本情報	居住：関西地区 生年月日：1982 年 性別：女性 障害発生年齢：18 歳 障害内容：左下肢機能障害 2 種 4 級 リハビリ期間：約 2 年
略歴	高校卒業後、就職してすぐに病気が見つかり、1 年ほど入院。退院後は自ら運動できるスポーツ施設を探し、障害者スポーツセンターの教室に通った。障害者スポーツ指導員から声をかけられ、19 歳でシッティングバレーボールを始め、1 年余りで日本代表となる。2006 年に結婚を機に転職。2008 年北京、2012 ロンドンと 2 大会連続でパラリンピックに出場。2014 年のアジアパラ競技大会メダリスト。 現在は、アシスタントコーチとして日本代表のサポートを行う。
競技基本情報	競技：シッティングバレーボール 主な戦績：2014 年アジアパラ競技大会メダリスト 競技開始年齢：19 歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯： ・子どもの頃から運動が好きで、小学校では兄とサッカーをして遊んでいた。中学校に入ると、先輩に誘われ、バレーボール部に入った。高校生の時は、運動部活動に所属せず、ヘルプ役として陸上やバレーボールの試合に出場していた。 ・高校卒業後、銀行に就職してすぐに病気が判明し入院。2 回の手術を経て約 1 年後に退院し、自ら運動できるスポーツ施設を探したところ、広報誌で障害者スポーツセンターを見つけた。バドミントンならできるかもしれないと思い、バドミントン教室に通い始めた。障害者スポーツセンターの指導員から「シッティングバレーを体験してみませんか」と誘いを受け、シッティングバレーボールクラブに参加した事がきっかけとなり、シッティングバレーボールを始めた。障害があってもスポーツが出来るという事が嬉しく、そんな様子を見て母も喜んでいた。 始めた場所：障害者スポーツセンター 重要な他者：障害者スポーツセンター指導員、母親
障害者スポー	・シッティングバレーボールを始めるに際しては、障害者スポーツ指導員か

ツ開始に影響を受けた社会的状況・環境・条件	ら誘いを受けたこと、一緒に練習するクラブの仲間がいたことが大きい。仕事が終わった後、通える場所に障害者スポーツセンターがあったことも影響している。
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	・子どもの頃から運動が好きだったこと、中学生の頃にバレーボールを経験していたことが影響している。
障害者スポーツ継続に関する状況	継続状況： ・通い始めたシッティングバレーボールクラブでは、日本代表選手と一緒に練習をしていた。同じ年代の仲間もいたことで楽しく続けることができた。障害者スポーツ指導員から専門的な指導を受けたこと、バレーボールの経験があったことから、シッティングバレーボールを始めて1年余りで日本代表に選出された。その後、日本代表監督からの指導を受け、2008年北京、2012年ロンドンと2大会連続でパラリンピックに出場した。アスリート雇用ではなかったため、遠征費や合宿の費用は自費だったが、2008年の北京大会後からは少しずつ自己負担が減っていった。2019年に引退し、アシスタントコーチとして選手を支えている。 主な実施場所：障害者スポーツセンター、強化拠点施設 重要な他者：日本代表監督
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	・練習する環境(場所・指導者)があったこと、子育てをサポートする環境(両親や家族の支え)があったことで競技を続けることができた。 ・2008年北京大会後から、国からの補助などにより自己負担が軽減された。
今後のスポーツ実施	・2019年からアシスタントコーチとして関わっている。シッティングバレーボールがメダルを獲得し、結果を残すようになれば認知度も上がり、スポンサーなどからの支援も受けられる。現在、コーチなどサポート体制は整ってきているため、練習する機会を増やしていけば、もっと強くなると思

	う。 ・スポーツを始める際には、スポーツ指導員やリハビリ現場の関係者などが様々な障害者スポーツを知っていること、声をかけることが重要。一般のスポーツセンターなどに障害者スポーツの一覧が記載されている冊子などがあれば知るきっかけになると思う。もっと広く、シッティングバレーボールを知ってもらう機会を作っていく必要がある。
まとめ	・子どもの頃から運動が好きで、中学ではバレーボール部に入っていた。 ・高校卒業後、就職してすぐに病気が判明し、入院。約1年後に退院し、自ら運動できるスポーツ施設を探し、障害者スポーツセンターの教室に通った。 ・シッティングバレーボールを始めるに際しては、障害者スポーツ指導員から誘いを受けたこと、一緒に練習するクラブの仲間がいたことが大きい。通える場所に障害者スポーツセンターがあったことも影響している。 ・シッティングバレーボールを継続するにあたっては、練習する環境(場所・指導者)があったこと、子育てをサポートする環境(両親や家族の支え)があったこと、2008年北京大会後からの自己負担の軽減が影響している。 ・2008年北京、2012年ロンドンと2大会連続でパラリンピックに出場した経験を活かし、現在はアシスタントコーチとして日本代表チームを支えている。

(兒玉 友)